

ジェロンディフと現在分詞について

渡 邊 淳 也

1. はじめに¹

この論文は、フランス語のジェロンディフ (*gérondif*) と現在分詞 (*participe présent*) の機能を解明することを目的とする。ジェロンディフは、つぎの (1), (2) にみるように、現在分詞のまえに前置詞 *en* がついた形である。

(1) 現在分詞 (*participe présent*) :

chanter > *chantant*, *danser* > *dansant*, *manger* > *mangeant*, etc.

(2) ジェロンディフ (*gérondif*) :

en chantant, *en dansant*, *en mangeant*, etc.

ジェロンディフは、*en* が義務的につくという構成が固定したのは18世紀からであるが、いまなお2つの形態素 (前置詞 *en* + 現在分詞) からなっているとみなすことができるのか、それとも単一の不連続形態素 (*morphème discontinu*) とみなすべきなのかをめぐって、先行研究のあいだには意見の相違がある (この点については3節でふれる)。

規範文法の常套的記述によると、現在分詞は形容詞的に直近の名詞にかかり、ジェロンディフは副詞的に主節の動詞 (あるいは主節全体) にかかるとされる。したがって、現在分詞の意味上の主語は直近の名詞であるのに対して、ジェロンディフの意味上の主語は主節の主語と同一指示であるとされる。たとえば、つぎのような例文がよく引かれる。

(3) *J'ai rencontré Paul en revenant du cinéma.* (佐藤 *et alii* 1991, p.335)
映画館から戻ってくる時、ポールに出会った。²

(4) *J'ai rencontré Paul revenant du cinéma.* (*ibidem*, pp.335-336)
映画館から戻ってくるポールに出会った。

直近の名詞にかかるということは、現在分詞は局所的な叙述関係をつくることができるということでもある。すなわち、つぎの (5) にみるような、独自の主語をもつ絶対分詞構文 (structure participiale absolue) が可能である。

- (5) **La nuit tombant** assez vite, même à Rome, en cette saison, vous rentrerez tôt chez elle [...] (Butor, *La modification*, p.70)
この季節は、ローマでさえ、夜が足早に来るので、あなたは早く彼女の家に帰るだろう。

一方、現在分詞が絶対分詞構文によって明示的な独自の主語をもちうるのとはことなり、ジェロンディフに独自の主語は直接示されてはいないものの、ジェロンディフの主語が主節の主語と一致しない例も決して少なくはない。また、その場合のジェロンディフ句 (syntagme gérondif または syntagme gérondival)³ は、かならずしも規範文法がいうように「熟語的」であるとも限らない。(6) はこんにちでは格言と化しているが、(7) ~ (9) のような例は、主節の主語とジェロンディフ句の主語がことなる文が、生産性をもつことを示しているように思われる⁴。

- (6) L'appétit vient **en mangeant**, la soif s'en va **en buvant**.
(Rabelais, *Gargantua*)
食べているうちに食欲は来るが、乾きは飲んでいっているうちに去る。
- (7) **En écoutant** ses paroles, sa sincérité m'a frappé. (木内 2005, p.41)
かれのことばをきいていると、その真摯さに感動した。(直訳：その真摯さがわたしを打った。)
- (8) Le bonheur s'obtient **en n'y pensant pas**.
(Montherlant, cité dans Wagner et Pinchon 1962, p.315)
幸せは、それを考えないと得られる。
- (9) Sur la gauche, **en remontant** la rue, juste après un autre bar qui fait angle avec le quai, se dresse un hôtel de trois étages [...]
(Fellag, cité dans Halmøy 2003, p.122)
通りをさかのぼってゆくと、左手に、川岸にむかう角にあるもう一軒のバーのすぐ後に、4階建てのホテルがそびえている。

本稿では、以上で概観したようなフランス語のジェロンディフと現在分詞について、それらを比較しながら、機能を解明することを目標にする。

以下の論述は、つぎのような手順によってなされる。まず2節から3節にかけては、ジェロンディフとはどのような形態か、という基本的な理解を定めることを目指す。そのうち2節では、ジェロンディフはフランス語に独特の形態か、という問いにこたえることを目指す。つぎに3節で、先行研究の一部で問われている問題ではあるが、ジェロンディフは単一の形態素とみなすべきか、という問題について論ずる。4節では、ジェロンディフと現在分詞の機能の相違について確認し、それにもとづいて、5節では現在分詞、6節ではジェロンディフの機能に関して、仮説をたてながら論ずる。

2. ジェロンディフはフランス語独特か：ラテン語とロマンス諸語における類似の形式について

現代ロマンス諸語で比較しているかぎりには、フランス語のジェロンディフに逐語的に対応する形態はみあたらない。そのことから、ほとんど直感的に、ジェロンディフはフランス語に独特の形態であると思われがちなのではなからうか。実際、文法書や先行研究では、ジェロンディフがフランス語に独特であるとされることがある (cf. Halmøy 2003, pp.20-21)。はたして、ジェロンディフはどのような意味でフランス語に独特なのか、そして、そもそも本当に独特であるといえるのかを確認することを目指して、以下ではラテン語とロマンス諸語における類似の形式について概観し、フランス語と比較してみることにしよう。

2.1. フランス語の「ジェロンディフ」という名称はラテン語の動形容詞 (gerundivum) にならってつくられたが、用法などの点で実際に対応しているのは、むしろ動名詞 (gerundium) の奪格形であった⁵。ラテン語の動名詞、動形容詞はつぎのような形態であった。

- (10) ラテン語の動名詞 (gerundium) :
amare > amandum, agere > agendum, audire > audiendum...
- (11) ラテン語の動形容詞 (gerundivum) :
amandus, agendus, audiendus...

ただし、両者は事実上同じ形式のことなる用法とみなすことができる（動名詞は主格をもたないので、対格で代表させて提示する慣用がある）。

- (12) Nihil **agendo**, homines male agere discutunt. (Seneca)

何もしないことにより、ひとは悪をなすことを学ぶ（小人閑居して不善をなす）。

- (13) Carthago **delenda** est. (Cato maior)

カルタゴは滅ぼされるべきである。

ラテン語にはほかに現在分詞 (participium praesentis) があった。おもに、進行相を示しつつ付加語的に用いられていた。たとえば、例 (15) では、現在分詞 *flagrans* は形容詞 *aeger* と等位接続されている。フランス語でこれに直接対応させられるのは、現在分詞ではなく、動詞派生形容詞である（下記 2.3. を参照）。

- (14) ラテン語の現在分詞 (participium praesentis) : *amans, agens, audiens...*

- (15) *aeger et flagrans animus* (Tacitus) 病んだ、燃え(つつあ)る心

2.2. フランス語以外のロマンス諸語に目をむけると、ラテン語の現在分詞系の形式 [(14)~(15)] と動名詞・動形容詞系の形式 [(10)~(13)] を対立させている言語と、その対立がすたれた言語がある。

イタリア語には現在分詞 (*participio presente*) とジェルンディオ (*gerundio*) の対立がある。現在分詞は形容詞的で、ときに名詞化する。ジェルンディオは副詞的で、用法はフランス語のジェルンディオフに似ている。イタリア語の現在分詞はラテン語の現在分詞、ジェルンディオはラテン語の動名詞・動形容詞に由来する。

- (16) イタリア語の現在分詞 :

andare > *andante*, *sorridere* > *sorridente*, *salire* > *saliente*, etc.

- (17) la luna **brillante** sul mare (Acanfora 1976, p.55) 海にきらめく月

- (18) イタリア語のジェルンディオ :

andare > *andando*, *leggere* > *leggendo*, *venire* > *venendo*, etc.

- (19) **Andando** in macchina, bisogna stare attenti. (*ibidem*, p.54)
車で行くときは気をつけないといけない。
- (20) Ho passato la serata a casa, **leggendo e guardando** la TV. (*idem*)
読書をしたり, テレビをみたりしながら, 夕刻を家ですごした。

2.3. イタリア語と少し事情がことなるのがスペイン語である。スペイン語ではラテン語の現在分詞に由来する形式が衰退し、動詞派生の形容詞として語彙化したものに限って現存している。生産的なのはラテン語の動名詞・動形容詞出身の形式のみであり、スペイン語でもヘルンディオ (*gerundio*) というが、日本におけるスペイン語学では、これを「現在分詞」と訳する慣習があるので、ラテン語・イタリア語の用語と混同しないよう注意しなければならない。

- (21) スペイン語の動詞派生形容詞：
cantar > cantante, correr > corriente, urgir > urgente, etc.
- (22) intonación **cantante** 歌うようなイントネーション, el mes **corriente** 今月
- (23) スペイン語の現在分詞：
cantar > cantando, correr > corriendo, salir > saliendo, etc.
- (24) **Cantando** se alegran, cielito lindo, los corazones.
(De Carvalho 2003, p.107)
歌っていれば, きれいな空も, 心もかるやかになる。

ひるがえって考えるとフランス語においても、ジェロンディフを別にして総合的形式だけを見るならば、スペイン語と同様であり、つぎの (25) にみるように、動詞派生形容詞と現在分詞が対立する例も局所的に存在する⁶。

- (25) pouvoir > pouvant vs. puissant, savoir > sachant vs. savant, fatiguer > fatigant vs. fatiguant, etc.

2.4. イタリア語のジェルンディオ, スペイン語の現在分詞は、進行相をあらわすさまざまな迂言形を作ることができる。

- (26) イタリア語 < stare + ジェルンディオ > :

In quel momento Paolo **stava** ancora **chiacchierando** con Lucia.

(Squartini 1998, p.130)

そのときパオロはまだルチアとおしゃべりしていた。

- (27) イタリア語 < andare + ジェルンディオ > :

La situazione **andava peggiorando**. (*ibidem*, p.210)

状況は悪くなってきていた。

- (28) スペイン語 < estar + 現在分詞 > :

¡ Siempre **te estás quejando** ! (*ibidem*, p.80)

おまえいつも文句言ってるなあ！

- (29) スペイン語 < ir + 現在分詞 > :

Así **irás cambiando** : te **irás volviendo** una canalla, como todos.

(*ibidem*, p.257)

そうやっておまえは変わっていくんだろうなあ。みんなとおなじ、ろくでなしになっていくんだ。

- (30) スペイン語 < andar + 現在分詞 > ⁷ :

No, no vas a **andar diciendo** tú esos, esas palabras.

(Torres Cacoullous 2000, p.167)

そんな（悪い）ことばを言ってまわるんじゃないよ。

それに対しフランス語では、現在分詞をもちいる迂言形は、中期フランス語では存在したものの、現代フランス語ではめずらしい⁸。(31), (32) とも作家による例外的な使用として文法書に引かれているが、とくに (31) は、通常は性数一致をしない現在分詞が性数一致をしているという点でもまた例外的である。

- (31) La terre **était riante** et dans sa fleur première.

(Vigny, cité dans Grevisse 1993, p.1311)

大地は笑っていて、最高の花をさかせていた。

- (32) Une onde sonore qui **allait s'élargissant**

(Camus, cité dans Grevisse 1993, p.1194)

ひろがって行きつつあった音波

2.5. フランス語のジェロンディオフは、前置詞 en がつねにともなうことにより

特異であるといわれることがある。しかしそのことは、かならずしもフランス語に固有の特徴というわけではない。スペイン語の現在分詞も中世までは en に先立たれていたし、古期イタリア語でもジェルンディオに in や con が冠せられていた (Halmøy 2003, p.21)。

- (33) « Questa gente che preme a noi è molta,
e vegnonti a pregar », disse l' poeta:
« però pur va, e **in andando** ascolta »

(Dante, *Purgatorio*, Canto 5, 43-45)

詩人曰ふ。我等に押寄する民数多し、
彼等汝に請はんとて来る、

されど汝止まることなく、行きつゝ耳をかたむけよ。(山川丙三郎訳)

2.6. 以上で示してきた 2.1. ～ 2.5. の比較から結論的にいうと、ジェロンディフは、つねに en がともなうことにより、現代においてはフランス語に独特であるといえる。しかし、機能的にみるならば、イタリア語における現在分詞とジェルンディオのように、フランス語における現在分詞とジェロンディフに類する弁別をもつ形態も存在するので、現在分詞とジェロンディフというふたつの形態も持っていることが、かならずしもフランス語に特異であるとはいえない。

3. ジェロンディフは単一の形態素か

この節では、ジェロンディフを単一の形態素とみなすことができるのかどうか、という問題についてふれておきたい。この問題は、一部の先行研究で問われているものの、なかには不十分な答えかたをすることにより、かえって混乱をきたしているものもあるからである。

3.1. 単一形態素説 (thèse mono-morphématique)

まず、ジェロンディフは単一の形態素をなしているとする説からみてゆこう。この説をとなえているのは、Bonnard (1987-1988), Gettrup (1977), Haspelmath et König (1995), Herslund (2000), Halmøy (2003), Kleiber (2007), ロドリゲス (2006) (2007) などである。

Bonnard (1987-1988) は、*en chantant* のくみあわせが独特のものであり、前置詞をとりかえることも、現在分詞をほかの非定形にとりかえることもできない (**en chanter*, **en chanté*; **à chantant*, **pour chantant*, **sans chantant*, etc.) ことを単一形態素説のひとつの論拠としている。

Bonnard (2001, p.81) は、それをさらに進めて、ジェロンディフを不定法の結合変異体 (*variante combinatoire*) であるとする。すなわち、非定形 (不定法・現在分詞) と、その前につく前置詞とが、つぎのような相補分布をなしているとする。

- (34) — *à voir*, *de voir*, *pour voir*, *sans voir*, **en voir*
 — **à voyant*, **de voyant*, **pour voyant*, **sans voyant*, *en voyant*

Haspelmath et König (1995) は、前置詞 *en* がジェロンディフにおいては固定して、接頭辞と化しているとみなすことを提案している (« *French en in en chantant could perhaps be regarded as a prefix* », *ibidem*, p.9)。

Kleiber (2007) も、基本的に、ジェロンディフの構成が固定しているという側面を重視することは同様である。

- (35) « Elle [=la solution mono-morphématique] peut aussi s'appuyer sur la sémantique, en invoquant la difficulté d'assigner un sens propre à chacun des deux « morceaux » du gérondif. Il n'est en effet pas facile d'attribuer à *en* et surtout à *-ant* une signification claire et univoque qui soit telle qu'elle explique les interprétations auxquelles donne lieu le gérondif » (Kleiber 2007, p.102)

(単一形態素説は、意味論にも依拠しうる。ジェロンディフのふたつの部分のそれぞれに固有の意味を付与することの困難さを引きあいに出すことができる。実際、そのままジェロンディフがもたらす解釈を説明するような、明確で一義的な意味を *en* に、そしてとりわけ *-ant* に付与することは、容易ではない。)

しかしその一方で、Kleiber (2007) は、Haspelmath et König (1995) のような接頭辞化説までは行かないほうがよいとして、単一形態素説に留保をつけるようなこともしている。

- (36) « Il vaut mieux considérer *en* comme le constituant d'une unité complexe figée, ce qui permet de conserver le lien avec la préposition *en*. »

(Kleiber 2007, p.102)

(*en* を固定した複合的単位の一部と考えた方がよい。それによって、前置詞の *en* との関連性を保つことができる)

さて、以上でみてきたような単一形態素説については、つぎのような問題点を指摘できると思われる。

まず、Bonnard の相補分布説 (34) は、前置詞のなかでも都合のよいところだけを拾いあげたものに過ぎず、不定法も現在分詞のどちらも後続させることができない前置詞 (*contre*, *selon*, *pendant*, etc.) が存在することをどのよう説明できるのかという疑問がある。

また、*en* が接頭辞化しているとの説は、かりにそのように認定したとしても、接頭辞 *en* が前置詞 *en* と共通の基盤をもつことを否定できるわけではない。実際、Franckel et Lebaud (1991) は、前置詞 *en* が名詞をみちびく用法 (*il est en ville*, *du papier en rouleau*)、接頭辞として完全に動詞の一部になる用法 (*enrouler du papier*)、およびジェロンディフの一部となる用法に共通した図式として、つぎのような記述を提唱している。

- (37) « *En* intègre le terme qui suit à la construction d'une occurrence complexe dont le spécificateur est constitué par ce terme et le situeur par le terme distinct. » (ibidem, p.63)

(*en* は、後続する辞項を、複合的な生起の構築に統合する。その生起の指定は、その辞項によって構成され、位置づけ先は別の辞項によって構成される。)

Kleiber (2007) の上記 (35) の引用は、Franckel et Lebaud (1991) のような研究が存在することを考えると、ほとんど研究の放棄に近い。また、(36) の引用は、前置詞 *en* との関連を保持することを主張しており、単一形態素説にくみすることを宣言していることとは逆方向である。矛盾をはらんだ主張といわざるを得ない。

なお、ロドリゲス (2006) (2007) は、単一形態素説にくみすると明言して

いるものの、仮説をたてる際には前置詞 *en* の機能を考慮に入れており、後述する本稿の立場に近いことを付言しておきたい。

3.2. 二形態素説 (thèse bi-morphématique)

一方、ジェロンディフは前置詞 *en* と現在分詞というふたつの形態素に分解して理解しなければならないとする説は、Henrischen (1967), Franckel (1989), Franckel et Lebaud (1991), 春木 (1991), Le Goffic (1993), Wilmet (1997), Kindt (1999), Lipsky (2003), De Carvalho (2003) などにみられる。

二形態素説は、まずなによりも、ジェロンディフという形式の成立にいたる歴史を重視する。ジェロンディフは12世紀ころから安定した生起がみられるようになり、18世紀になって *en* と現在分詞のくみあわせが完全に固定したものであるが、前置詞 *en* と現在分詞がくみあわさることでジェロンディフが成立したことは、疑いをさしはさむ余地がない。つぎの引用にみるように、二形態素派は確信をもってジェロンディフを *en* と現在分詞に分解しようとする。

- (38) « Le gérondif n'existe pas en français moderne. Selon nous le français a une seule forme verbale en *-ant*, et cette forme se combine en certains cas avec la préposition *en*. » (Henrischen 1967, p.100)

(ジェロンディフは、近代フランス語には存在しない。われわれの考えでは、フランス語は *-ant* におわる形式をもっているだけであり、それがいくつかの場合に前置詞の *en* とくみあわさるだけである。)

- (39) « De fait, ce qui est ainsi nommé dans les grammaires de cette langue—soit l'expression *en + Vant*—n'est rien d'autre, comme on montrera, qu'un emploi substantival de ce nom adjectif qu'est le participe « présent », l'opérateur de substantivation étant, en l'occurrence, la préposition *en*. » (De Carvalho 2003, pp.100-101)

(実際、この言語 [=フランス語] の文法でそのように [=ジェロンディフと] よばれているもの—すなわち *en + Vant*—は、後でしめすように、現在分詞という形容詞の名詞的用法にほかならない。そして、この場合、名詞化の操作子は、前置詞の *en* なのである)

これらの説は、ジェロンディフの通時的な成立という、動かしようのない事実にもとづいているという点で、説得力をもっていると思われる。

ところで、二形態素説にはさらに、ヴァリエントともいうべきものがある。それは、Herslund (2000) が提唱する「現在分詞の第2度」(le degré 2 du participe présent) という説である。Herslund はつぎのように主張している。

- (40) « C'est l'élément *de* (parfois à) avec l'infinitif et *en* avec le participe qui, iconiquement, signalent le degré 2, c'est-à-dire une forme non-finie qui garde une certaine autonomie par rapport à son verbe principal. » (ibidem, p.87)
- (不定法に関しては *de* (ときに *à*)、現在分詞に関しては *en* という要素が、類像的に、第2度を示しているのである。第2度とはすなわち、主動詞に対して一定の自立性をもつ非定形である。)

つまり、下記 (41) のような単独不定法 (infinitif pur) が、より大きな自立性を必要とするときに、(42) のように不定法を導入する前置詞をとる場合がある (標識つき不定法 (infinitif avec indice)) こととまったく同じように、現在分詞がそれを導入する前置詞 *en* をとる場合がある、というのである。表であらわすと (43) のようになり、不定法の場合も、現在分詞・ジェロンディフの場合の、前置詞を冠せられた形態を「第2度」と呼んでいる。

- (41) Nous voulons aider. / Wir wollen helfen. (*idem*)
わたしたちは手伝いをしたい。
- (42) Nous promettons **d'**aider. / Wie versprechen **zu** helfen. (*idem*)
わたしたちは手伝うことを約束します。
- (43)
- | | Infinitif | Participe |
|----------------|------------------|-----------------------------|
| Degré 1 | chanter | chantant |
| Degré 2 | de chanter | en chantant (<i>idem</i>) |

しかし、前置詞がついた形態が、もとの形態に対して自立性を高めた対応物であるとするのは、それだけではあまり機能の違いを説明することにはならないという問題があると思われる。また、不定法の場合と現在分詞・ジェロンディフの場合とで、「第1度」から「第2度」への移行に同じ意味合いがあるのか、という疑問もわいてくる。

3.3. 固定化の相対性

ジェロンディフが単一の形態素をなすか、それとも前置詞 en と現在分詞というふたつの形態素に分析されるべきかという問題は、以上でみてきたように、いささか議論が混乱をきたしているように思われる。

そもそも、歴史的な出自が「前置詞 en + 現在分詞」であることと、ジェロンディフとしての固定化 (figement) あるいは文法化 (grammaticalisation) がかなりの程度進んでいることとは、かならずしも矛盾せずに両立することではなかろうか。固定化・文法化はもとより相対的な概念であり、Kleiber (2007) がことさらに強調しているような、単一形態素説と二形態素説を決定的に対立させる議論自体がおかしいのではないか。

たとえば、つぎの (44) (45) の例にみるように、ジェロンディフにおかれた動詞にかかる接辞代名詞は、ジェロンディフを構成する en と現在分詞のあいだに割りこむのが定位置である。これは en が接頭辞といえるほどには総合化しておらず、固定化に一定の相対性を認めるべきであることを示しているのではなかろうか。

(44) **En y réfléchissant** bien, je n'étais pas malheureux.

(Camus, *L'Étranger*, p.64)

そのことをよく考えてみたら、わたしは不幸ではなかった。

(45) **En la voyant** ainsi, en train de m'attendre, j'avais peine à croire à notre liaison.

(G. Levett, *Le ciel t'aidera*, p.32)

彼女がそうしてわたしを待っているのをみて、わたしはわたしたちの関係を信じるのがむずかしかった。

以上のようなことから、本稿では、まずジェロンディフ単一形態素説と二形態素説とが決定的な対立をなしていないことを前提としたうえで、実際の分析では前置詞 en および現在分詞の特性を十分に考慮しながら、ジェロンディフの機能を考察してゆくことにしたい。したがって、あえてどちらかというなら、二形態素説に近い立場をとることになる。

4. ジェロンディフと現在分詞の用法の対比

この節では、ジェロンディフと現在分詞の機能の解明の手はじめとして、ふ

たつの形式の用法を対比してみたい。

4.1. 春木 (1991)

まず, ジェロンディフと現在分詞の用法の対比に関してたいへん参考になる, 春木 (1991) による記述を参照することにする。まず, まとめの表を引用する。

(46) 春木 (1991, p.19) によるまとめ :

	同時性	先行性	手段	原因・理由	条件・仮定	対立・譲歩
ジェロンディフ	○	×	○	△	○	○
現在分詞構文	○	○	×	○	○	○

以下, 両形式の違いを中心に, 春木 (1991) が指摘する重要な事実をまとめておく。

4.1.1. 主動詞の内容を敷衍するタイプの現在分詞構文を, ジェロンディフで言いかえようとすると, 前置でも後置でも不自然になる。

(47) Les enfants jouaient dans la cour, **lançant** la balle, **sautant** à la corde. (*ibidem*, p.14)

子どもたちは, ボールを投げたり, なわとびをしたりして, 中庭で遊んでいた。

(48) ? **En lançant** la balle et **en sautant** à la corde, les enfants jouaient dans la cour. (*idem*)

4.1.2. ジェロンディフ句が quand 節 (... とき) の意味で解釈されるときは avoir, pouvoir は用いられないが, dès que 節 (... するやいなや) の意味で解釈されるときは容認されるようになる。

(49) (*) Beaucoup de femmes quittent leur emploi **en ayant** des enfants.

(ロベルジュほか 1983, p.235 および春木 1991, p.15)

多くの女性が, 子どもが[?]いると /^{ok}できると, 仕事をはなれる。

(50) * Beaucoup de femmes quittent leur emploi **quand elles ont** des enfants. (*idem*)

- (51) Beaucoup de femmes quittent leur emploi **dès qu'elles ont eu des enfants.** (*idem*)

ロベルジュほか (1983, p.235) では (49) にアスタリスクがついているが、それは (50) の解釈を前提としたときである。春木 (1991, p.15) によると、(51) のように起動相的に解釈するなら容認度は改善する。

4.1.3. 主動詞が être や rester のとき、付帯状況をあらわすためには、ジェロンディフよりも à + 不定法のほうが自然である。

- (52) * Elle restait à la maison **en lisant** des livres.

(ロベルジュほか *ad loc.* および春木 *ad loc.*)

- (53) Elle restait à la maison **à lire** des livres. (*idem*)

彼女は家にとどまって、本をよんでいた。

4.1.4. 現在分詞は複合形 (完了形) をもつが、ジェロンディフの複合形は稀である。

- (54) **S'étant promené** une bonne heure, ils s'installèrent dans un café.

(春木 1991, p.16)

たっぶり一時間散歩したあと、彼らはカフェに身を落ち着けた。

また、現在分詞は複合形を用いなくともふたつの継起的な事行 (procès) をあらわしうるが、ジェロンディフはそれができない。

- (55) Le professeur, **ouvrant** le livre, commença à nous réciter un poème.
(*idem*)

先生は本をひらくと、(その本のなかの) 詩をよみはじめた。

- (56) Le professeur, **en ouvrant** le livre, commença à nous réciter un poème. (*idem*)

先生は本をひらきながら、(たまたま覚えていた) 詩を暗誦しはじめた / (その本のなかの) 詩をよみはじめた。

4.1.5. 現在分詞にくらべて、ジェロンディフでは「原因」「理由」をあらわすのはかなり制限があり、とくに avoir, être, pouvoir の使用に強い制約がある。

(57) **En me voyant** dans cet état, il s'est mis à crier. (*idem*)

私がかんな状態なのをみて、彼は叫びだした。

(58) * **En étant** malade, il n'a pas pu assister à la réunion. (*idem*)

病気なので、彼は会議に出席できなかった。

4.1.6. ジェロンディフとちがって、現在分詞では「手段」をあらわすのはむしろかしい。

(59) **En enseignant** l'anglais, il gagne sa vie. (*ibidem*, p.19)

英語を教えることで、彼は生計をたてている。

(60) * **Enseignant** l'anglais, il gagne sa vie. (*idem*)

4.1.7. 以上のような相違をあげている春木 (1991) は、ジェロンディフと現在分詞の基本的なちがいについて、つぎのような説明をしている。

(61) Il voyageait **en prenant** des photos. (*ibidem*, p.14)

(62) Il voyageait, **prenant** des photos. (*idem*)

(63) 「違いをきわただせた訳をするならば、[(61)] は「彼は写真を撮るために旅行をしていた」、[(62)] は「彼は旅行をしながら写真を撮った」とでもなるだろう。つまり、[(62)] においては旅行をするという行為と写真を撮るといふ行為が、いわばたまたま並行していたことを表わしているだけなのに対して、[(61)] の文では、en が存在することにより二つの行為の間により密接な関係が打ち立てられているのである。言い換えれば、voyager という事行が、prendre des photos という事行のなかに位置づけられている localisé のである」 (*idem*)

(64) 「両者の違いは結局、前置詞 en の有無に由来するのであり、en の働きを解明することにより説明できると予想される。言うまでもなく、en はもともと空間的位置づけ localisation spaciaie [*sic*] を行なう前置詞であり、そこから時間的・抽象的位置づけへと拡大使用される。」

(*ibidem*, pp.19-20)

ここで提示されている位置づけ (localisation) という概念はたいへん重要であるが、ジェロンディフが行なうのはどのような位置づけなのか、という点についてはいくつかの考え方がありうる。これについては 6 節で論じたい。

4.2. さらになる相違点

この節では、さらにジェロンディフと現在分詞を対比して、前節でみた春木 (1991) で示されている以外の相違点を、大きくわけて 3 つ確認しておきたい。

4.2.1. まず全体的な対比の枠組みとして、春木 (1991) では、ジェロンディフと現在分詞が潜在的に範列的な関係になりうる範囲でしか比較していないため、その範囲外については指摘がなされていない。そこで、そもそも現在分詞がジェロンディフと範列をなすのは、現在分詞が遊離位置にあるときに限られる、ということをも重要な対比としてつけ加えたい。たとえば、前節でみた例のうち、最後の 4 つ (以下に再掲) をみなおすと、

- (65) [= (59)] **En enseignant** l'anglais, il gagne sa vie.
 (66) [= (60)] * **Enseignant** l'anglais, il gagne sa vie.
 (67) [= (61)] Il voyageait **en prenant** des photos.
 (68) [= (62)] Il voyageait, **prenant** des photos.

容認される例 [(68)] であろうが、容認されない例 [(66)] であろうが、問題になっている現在分詞はいずれも遊離位置におかれている。しかし実際には、現在分詞の用法の範囲はひろく、(69) のような付加語的用法、(70) のような知覚動詞の目的補語の属辞としての用法、そして、1 節でも言及した (71) のような絶対分詞構文は、現在分詞に独特の領分であり、おおよそジェロンディフとの比較がなりたたない。もちろん、それゆえに比較する価値がないと考えることも可能であるが、本稿では、観察の対象となる用法をしばり込むことなく、両形式の機能全般を理解するようにつとめたい。

- (69) Pour les personnes **désirant** perdre du poids : les salades et crudités sont indiquées, à condition de choisir des assaisonnements légers [...] (H, Dupin, *Alimentation et nutrition humaines*, p.984)

減量したい人には、サラダ菜や生野菜はおすすめです。ただし、軽い調味料を選ぶことが条件です。

- (70) C'est alors que je l'ai vu **sortant** d'une parfumerie à la hauteur du métro Simplon. (J. Raspail, *Hurrah Zara !*, p.268)

そのとき、メトロのサンブロン駅のあたりにある香水屋からかれが出てくるところをみた。

- (71) [= (5)] **La nuit tombant** assez vite, même à Rome, en cette saison, vous rentrerez tôt chez elle [...]

4.2.2. つぎに、遊離位置の現在分詞に限ってみても、まだあまり注目されていない用法がある⁹。(46)の表に出していない対比点をひとつつけくわえると、現在分詞には結果をあらわす用法があるのに対して、ジェロンディフで結果をあらわすことは不可能である。ちなみにこの用法は、以下の例のように、報道文で多く出てくる傾向がある。これらはいずれも、ジェロンディフで言い換えることはできない。

- (72) La fusée Ariane qui devait lancer deux satellites de télécommunications Yahsat Y1A et Intelsat New Dawn mercredi soir depuis le Centre spatial guyanais de Kourou n'a pas décollé après l'allumage de son moteur cryogénique, **entraînant** le report du tir, selon Arianespace. (*Libération*, le 31/3/2011)

アリアネスパス社によると、ギアナのクルー宇宙センターから、水曜の夜、ヤーサット Y1A とインテルサット・ニュー・ドーンというふたつの通信衛星を打ち上げるはずだったロケットのアリアーヌは、低温生成エンジンに点火したあと、離陸することができず、それにより、打ち上げが延期されることになった。

- (72') * **en entraînant** le report du tir.

- (73) Les chocs à répétition ont perturbé les circuits de refroidissement des réacteurs de deux centrales nucléaires dans la région de Fukushima, **entraînant** une élévation anormale du niveau de radioactivité. (*Libération*, le 12/3/2011)

くりかえされた衝撃が、福島にあるふたつの原子力発電所の原子炉の冷却装置の循環をさまざまに、放射能のレベルの異常な上昇をもたら

した。

(73') * **en entraînant** une élévation anormale du niveau de radioactivité.

(74) L'appareil, qui faisait la liaison Rio-Paris, s'était abîmé en pleine nuit dans l'Atlantique, le 1^{er} juin 2009, **causant** la mort des 228 passagers. (*Libération*, le 6/5/2010)

リオデジャネイロ・パリ間をむすんでいたその飛行機は、2009年6月1日の夜中に、大西洋に沈み、228人の乗客が死亡したのだった。

(74') * **en causant** la mort des 228 passagers.

注目すべきことは、これらの結果をあらわす現在分詞は、すべて主節からみて後置されている、ということである。それは、原因・理由をあらわすときにジェロンディフに制約があることと鏡像的な関係にあるといえる。というのも、原因・理由をあらわす現在分詞は、主節に対して前置されるからである。

現在分詞を主節に前置したとき原因・理由を、そして後置したとき結果をあらわしうる¹⁰ ということは、結局、時間的・論理的前後関係を類像的に反映する並置構文 (parataxe) の一種とみなすことができる。たとえば、つぎの(75)にみるような条件法の並置が、反実的な假定・帰結のように解釈されることは、並置が時間的・論理的前後関係を反映したものと解釈されることの一環である。

(75) *J'aurais un peu d'argent, je m'achèterais l'intégrale de Mozart.*

(Riegel *et alii* 1994, p.318)

少しばかりのお金があれば、モーツァルト全集を奮発するだろうに。

そのように考えるなら、4.1.4 節でみた、「現在分詞は複合形を用いなくともふたつの継起的な事行をあらわしうるが、ジェロンディフはそれができない」という事実もうまく説明ができる。

このことは、より一般的に言いなおすと、つぎのような対比の一環であると思われる。すなわち、ジェロンディフ句が従属節的であるのに対して、現在分詞は同格的、ないし並置的に機能するのである。

(76) **En entrant** dans le salon des Rouargue, Gilles eut **ainsi** l'impression que son enfance lui sautait à la tête.

(Sagan, cité dans Gettrup 1977, p.253)

ルーアルグ家の居間にはいるとき、そのようなわけで、ジルはかれの幼年時代が頭のなかではねているような印象をいだいた。

(76') * **Entrant** dans le salon des Rouargue, Gilles eut **ainsi** l'impression que son enfance lui sautait à la tête.

(76'') **Entrant** dans le salon des Rouargue, Gilles eut l'impression que son enfance lui sautait à la tête.

Gettrup は (76') のようなタイプの例の容認度の低さの原因について、つぎのように言っている。

(77) « [...] la raison peut, précisément, en être que le syntagme participial ne constitue pas une subordination au niveau du gérondif et des propositions subordonnées. » (*idem*)

(その理由はまさしく、分詞句が、ジェロンディフや従属節のようなレヴェルでの従属を構成しないからではなからうか)

つまり、(76) はジェロンディフ句を照応的な様態副詞 *ainsi*¹¹ で受けなおしていることからわかるように、ジェロンディフ句が主節の命題に従属する様態として堅固にむすびつけられているため、(76') のように、現在分詞句はおなじ環境をきらう。ところが、(76'') のように *ainsi* をなくして、現在分詞句の自由度を高めると、容認可能性が回復するのである。

4.2.3. 最後に、現在分詞は時間的的定位をあらわさないという事実をあげることができる。たとえば、つぎの (78) のジェロンディフを (78') のように現在分詞で言いかえることはできない。

(78) Fatigué **en quittant** le lycée, après six heures de classe, tu as fait tout un grand détour jusqu'à l'Île de la Cité.

(Butor, cité dans Gettrup, *ad loc.*)

6 時間の授業をおえて高校を出るとき、疲れていて、きみはシテ島まで大きく遠回りをした。

(78') * Fatigué, **quittant** le lycée, après six heures de classe, tu as fait

tout un grand détour jusqu'à l'Île de la Cité.

この事実は、4.1.7 節で引用した春木 (1991) のいう、ジェロンディフには en があることにより、時間的な位置づけが明示されている、ということと関連づけることができよう。また、前節 4.2.2 節で確認したジェロンディフ句の従属節性とも関連している。時間的的定位もまた、文要素として文内に包摂されるものであり、現在分詞の並置的な性質とは合わないと考えられる。

以上、この 4 節では、のちの議論のためにもおさえておくべき、ジェロンディフと現在分詞の機能の相違点についてまとめておいた。

5. 現在分詞の機能について

以下では、現在分詞の機能について考察する。

5.1. 未完了アスペクトと入射的視点

これまで、現在分詞そのものの機能に関する研究は不十分であった。比較において有標項とみなされたジェロンディフに研究が集中していたことが原因であると思われる。ジェロンディフ二形態素説をとるなら、ふたつの形態素のうちの一つである現在分詞の機能の解明が前提的に必須になるはずであるが、奇妙なことに、二形態素説の研究のなかにも、-ant の機能についての考察はほとんどみられない。また、Gettrup (1977), De Carvalho (2003) のように現在分詞とジェロンディフを比較した研究のなかにも、現在分詞の本質的機能に関する考察は欠落しているといわざるを得ない。先行研究のなかに存在する現在分詞論は、Guillaume (1929), Imbs (1960), Le Bidois et Le Bidois (1967), Togeby (1983) のような動詞体系全般におよぶ研究にくわえて、Arnavielle (1997) (2003) の現在分詞そのものに焦点をあてた例外的に貴重な研究しかない。

少数の先行研究は、いずれも、進行相などの未完了アスペクトの標示を現在分詞の機能とみなすことで一致している。たとえば、Guillaume (1929) によると、現在分詞は、現在分詞におかれた動詞のあらゆる事行が、動詞に内在する運動の始点と終点のあいだの「中間的位置」(positions médianes, *ibidem*, p.16) にあることを示しているという。Arnavielle (1997) も Guillaume に追随して、「分割的価値」(la valeur sécante, *ibidem*, p.47)¹² が -ant という形

態素のあらゆる用法をつらぬく統一的な原理であるとしている。また、Imbs (1960) は、つぎのように言っている。

(79) « [...] le participe en *-ant* exprime l'inaccompli, et peut par conséquent, dans la phrase, exprimer la simultanéité allant jusqu'à une temporalité coextensive d'une temporalité intemporelle, si l'on peut dire ; [...] Sa valeur d'aspect étant celle de l'inaccompli, la valeur temporelle du participe est celle du verbe principal de la phrase dans laquelle on le rencontre. » (*ibidem*, p.160)

(*-ant* 型の分詞は、未完了をあらわす。したがって、文中では、いわば非時間的な時間性が外延をともにする時間性までも含めた「同時性」をあらわす。[中略] そのアスペクト的価値が未完了の価値であることから、分詞の時間的価値は、分詞がみられる文の主動詞の時間性と同じものである。)

しかしながら、4.2.2 節でみたように、現在分詞は実際には、もちいられる文脈や、文中でおかれる位置によって、主節に対する先行性をあらわしたり、結果をあらわしたりすることもできるのであって、かならずしも「同時性」の概念が適用できるとはかぎらない。

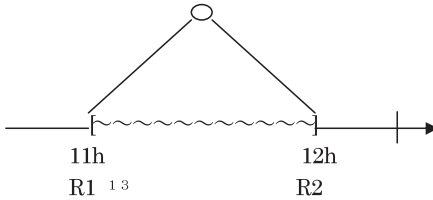
本稿の立場から言うと、基本的には未完了アスペクトという価値を現在分詞に認めることはできると考えるが、そこにいう「未完了アスペクト」の概念を精緻化しておく必要があると思われる。

そこで以下では、Desclés (1995) の理論に着想を得て提案された、Novakova (2001) によるアスペクトの図式化を参照することにした。下記に (80) ~ (82) として引用するが、例文、図ともに Novakova (2001) のものである。ただし、図の細部は一部簡略化している。彼女は、(80) にみられるような、フランス語の単純過去が典型となる全体的アスペクト (*aspect global*)、(81) のような、フランス語の半過去が典型となる未完了アスペクト (*aspect inaccompli*)、(82) のような、フランス語の複合過去が典型となる完了アスペクト (*aspect accompli*) の3つを区別している。

(80) **aspect global** : vision synoptique (Novakova 2001, p.216)

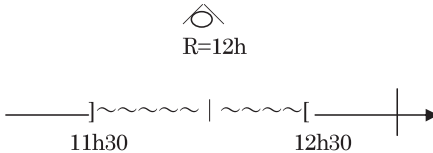
Ce jour-là, il **déjeuna** de 11h à 12h.

(その日、彼は 11 時から 12 時にかけて昼食をとった)



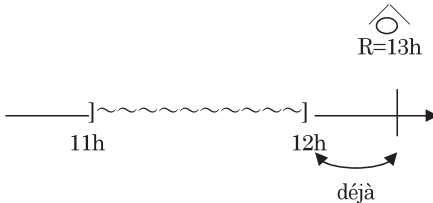
(81) **aspect inaccompli** : vision incidente (*ibidem*, p.217)

À midi, il **pleuvait**. (正午には、雨が降っていた)



(82) **aspect accompli** : vision rétrospective (*ibidem*, p.218)

Il a déjà **déjeuné**. (彼はすでに昼食をすませた)



このアスペクト論は、事態そのものの時区間が、それ自体で始点・終点が明確になっていることにより「閉じている」(Novakova の図では、時区間を [~ ~] とえがくことにより表示される)か、それとも始点・終点が明確にならないことにより「開いている」(Novakova の図では、時区間を] ~ ~ ~ [とえがくことにより表示される)か、ということだけでなく、事態そのものの時区間のどこに注目しているかという、「視点の時区間」をも区別するものである。おおまかな図式化においてはいずれもひとしく「完了相」とされる (80) と

(82) は、前者が視点の時区間が事態の時区間と完全に一致すること（総覧的視点 (vision synoptique)）によって特徴づけられるのに対して、後者が事態の時区間の終点の外部に後続する結果状態に視点がおかれること（回顧的視点 (vision rétrospective)）によって特徴づけられる、というかたちで区別されるのである。一方、(81) の未完了相は、事態そのものの時区間が開いていること（のみ）によってではなく、視点の時区間が事態の時区間の中途にあたる一部しか対象としていないこと（入射的視点 (vision incidente) ¹⁴）によって特徴づけられる。中途のみを視野におさめていることにより、事態はその内部から、いわば、その真っただなかでえがき出されることになるのである。

ここで、現在分詞はまさしく (81) のような、事態の時区間の途中にあたる一部に着目する、「入射的視点」という意味での、「未完了アスペクト」を標示しているとする仮説を提出したい ¹⁵。

そのことは、たとえば、つぎの (83)、(83') のように、知覚動詞の直接目的補語の属辞になる現在分詞を、擬似関係節 < qui + 半過去 > で言い換えることができることによって裏づけられる。半過去という時制は、(81) の図式において、まさに未完了アスペクトの標示の最たるものとして扱われていたことを思いおこそう。

(83) Baptiste. Eh bien ! faut-il te l'avouer, ta vas te moquer de moi, parce que je sais que je n'ai pas le sens commun... Je suis jaloux !

ANDRÉ. Toi ?

Baptiste. Oui, depuis quelques jours Victoire s'absente... c'est pas que je pense... mais je l'ai suivie une fois... je l'ai vue **parlant** à un beau monsieur décoré.

ANDRÉ. Que signifie?...

Baptiste. Ce matin encore, tu vois bien, elle est sortie pour venir te voir, et elle n'est pas encore arrivée.

ANDRÉ. Allons donc... tu me fais rire avec tes craintes, ah ! ah ! ah !

(Deslandes et Didier, *L'enfant du faubourg*, pp.19-20)

バティスト：さて、きみに打ちあけないといけないんだ。ぼくのことをばかにするだろうと思うよ。常識をなくしているんだから。ぼくは嫉妬しているんだ。

アンドレ：君がかい？

パティスト：そう、何日かまえから、ヴィクトワールはちよくちよく留守をするんだ... まさかとは思うけど... 一度、あとをつけてみたんだ。そうしたら、彼女が着かざった美男子と話しているのをみたんだよ。

アンドレ：どういうことだ？

パティスト：今朝も、わかると思うけど、彼女はきみに会いにいくといって出ていったんだぜ。でもまだ来ていないよな。

アンドレ：おいおい、そんなに心配するんじや、笑ってしまうよ。はっはは。

(83') ... je l'ai vue qui **parlait** à un beau monsieur décoré.

文脈が明確になるように、(83) をやや長く引用しておいた。ここでパティストが心配していることは、ヴィクトワールが浮気をしているのではないか、ということであるが、もちろん、ヴィクトワールの行動の一部始終をみたわけではなく、わずかに、見知らぬ男性と話しているところを一部見ただけである。そうであるからこそ、アンドレに笑われるような過度の心配なのである。このことは、(80) の「入射的視点」という図式によく合致するものである。

5.2. いくつかの例証

以下ではさらに、現在分詞が「入射的視点」という意味での未完了アスペクトを標示するという説を支持しうる、いくつかの論拠をみてゆこう。

5.2.1. 前節 5.1. で示した、知覚動詞の直接目的補語の属辞になる場合については、さらにその意味効果を考慮に入れることができる。Le Bidois et Le Bidois (1967) は、(84) をはじめとするいくつかの例を引きながら、(85) のように言っている。

(84) J'ai vu **brûler** des testaments, j'ai vu des mères **dépouillant** leurs enfants, des maris **volant** leurs femmes.

(Balzac cité dans Le Bidois et Le Bidois 1967, t.1, p.483)
遺言状が燃やされるのをみた。母親が子どもたちからむしり取ったり、夫が妻から盗んでいたりをみた。

(85) « Pour peu que l'on soit attentif à ces participes présents, on constate combien ils sont plus expressifs que ne le seraient des infinitifs ;

ils peignent l'action sous l'aspect de durée, de continuité, au lieu de l'énoncer simplement, comme ferait l'infinitif, en tant qu'action qui se mêle ou succède à d'autres. » (Le Bidois et Le Bidois, *ad loc.*)

(これらの現在分詞をすこしばかり注意深くみるならば、それらがどれほど不定法より表現的であるかに気づく。現在分詞は行為を、持続や連続性といった相のもとでえがき出すのであり、不定法のように、単に、ほかの動作とまぎれたり、継起するだけのものとして述べるのではない。)

ここでみられるような「表現性」は、行為を、それが行なわれている最中でとらえ、えがき出していることに由来するものであり、まさしく現在分詞が「入射的視点」を示していることから出てくる意味効果であるといえよう。

この意味効果は、ここでもまた、「入射的視点」の最たる事例である半過去と並行的なものとして理解することができる。すなわち、つぎの(86)の例のような、いわゆる「絵画的半過去」(*imparfait pittoresque*)が、

- (86) La clef tourna dans la serrure. Monsieur Chabot **retirait** son pardessus qu'il **accrochait** à la porte d'entrée, **pénétrait** dans la cuisine et **s'installait** dans son fauteuil d'osier.

(G. Simenon, *La danseuse du Gai-Moulin*, dans *Œuvres romanesques*, p.599)

鍵が鍵穴のなかで回った。シャボー氏は外套を脱ぎ、それを入り口のドアにかけるのだった。そして、台所に入り、柳のいすに腰をおちつけるのだった。

本来なら完了相の時制で語られるはずの事態を、ことさらにその内側からとらえようとするところから、ひとつひとつの動作をいわばスローモーションのようにえがき出すことになり、ここでは、探偵小説に独特のサスペンス効果が得られるのである。このことは、(84)のような例における現在分詞が、それがあらゆる行為にいっそうの注目を払わせる効果をもたらすのと並行的である。

5.2.2. すでに 2.4 節でも言及したことであるが、現代ではほとんどすたれたものの、現在分詞はかつては進行相をあらゆる迂言形を作ることができた。

(87) [= (31)] La terre **était riante** et dans sa fleur première.

(88) [= (32)] Une onde sonore qui **allait s'élargissant**

進行相とは、展開しつつある動作をその途中でとらえる「入射的視点」に帰することができる。したがって、進行相をあらわす迂言形に現在分詞が用いられたということもまた、未完了アスペクト説の論拠となりうる。

5.2.3. 付加語的用法で、現在分詞は、(89) のような絵画の題名、あるいは、(90) のような報道写真の「絵とき (légende)」にあらわれることがある。

(89) *La Liberté **guidant** le peuple* (E. Delacroix)

『民衆をみちびく自由の女神』(ドラクロワ)

(90) Georges Frêche, l'an dernier, **faisant** la promotion d'*Odysseum*

(quotidien *Midi libre*, cité dans Arnavielle 2003, p.42)

昨年、『オディセオム』(モンパリエにあるショッピングセンター)の
宣伝をするジョルジュ・フレッシュ

この種の絵画の題名や、絵とくに共通していることは、一瞬をきりとる(と思われている)静止画像がもっている未完了性、すなわち、「入射的視点」である。それらをあらわすには、「入射的視点」によって未完了アスペクトを示す現在分詞が適しているのである。こうした用法における現在分詞は、5.1 節の(83)や、5.2.1. 節でみたような、知覚動詞の直接目的補語の属辞としてあらわれる現在分詞が、一部始終ではなく部分的に知覚したことを示すことと似た機能を果たしているといえよう。

5.3. さまざまな用法への適用

以下ではさらに、現在分詞の多様な用法へと観察の範囲を拡張し、すくなくとも一見したところでは、本稿がとっている未完了アスペクト説の適用が困難にみえるような事例についても説明をこころみよう。

5.3.1. まず、つぎの(91)、(92)のように、現在分詞が主節で示された事態に後続する結果をあらわす場合を考えてみることにしよう。

- (91) [= (73)] Les chocs à répétition ont perturbé les circuits de refroidissement des réacteurs de deux centrales nucléaires dans la région de Fukushima, **entraînant** une élévation anormale du niveau de radioactivité.
- (92) [= (74)] L'appareil, qui faisait la liaison Rio-Paris, s'était abîmé en pleine nuit dans l'Atlantique, le 1^{er} juin 2009, **causant** la mort des 228 passagers.

これらの例で現在分詞におかれた動詞 *entraîner*, *causer* は、いずれも、事態そのものの性質としては完了相のできごとを示している。これらの例はどのように考えればよいのであろうか。

これについては、5.2.1. でころもみた半過去とのアナロジーによる説明が、ここでも有効であると考えられる。絵画的半過去の下位分類のひとつとされることもある、「結末の半過去 (*imparfait de clôture*)」が、まさしく、結果を効果的に提示する機能をもっていることを思いおこそう。つぎの (93) のような例がそれにあたる。

- (93) Comme elle avait été à l'Opéra, une nuit d'hiver, elle rentra toute frissonnante de froid. Le lendemain elle toussait. Huit jours plus tard, elle **mourait** d'une fluxion de poitrine.

(Maupassant, *Regula*, dans *Contes et nouvelles*, vol. 1, p.407)

ある冬の夜、彼女はオペラに行ってきたので、すっかりこごえてかえってきた。翌日、彼女は咳をしていた。1週間後、彼女は肺炎で死ぬのだった。

ここで、「elle **mourait**」と半過去が用いられていることにより、彼女が死んだという結果が、元来は完了的な事態であるにもかかわらず、あえて前述の「入射的視点」のもとにとらえかえされることによって、それがあたかもスローモーションのようにえがき出される（このこと自体は、絵画的半過去全般と同様である）ようになり、重大な結果という意味効果もたらされるのである。

ひるがえって (91), (92) を考えると、現在分詞であらわされている結果は、いずれも重大なものであり、結末の半過去と同様、その重大さゆえに、「入射

的視点」によって、事行をあえてその真っただ中からえがき出すという機能を現在分詞が果たしていると思われる。このように考えると、(91)、(92) のような例もまた、現在分詞が「入射的視点」をあらわすという本稿の仮説と合致する例であるといえる。

5.3.2. 付加語的用法の現在分詞に関しては、すでに 5.2.3 節で部分的に考察したが、そこでは、絵画の題名や報道写真の絵ときなど、潜在的な知覚が背後にあるような例に限られていた。それでは、(89)、(90) のような例にかぎらず、付加語的用法全般に関してはどうであろうか。とりわけ、(94) における venir のような、語彙的アスペクトとして瞬間相の動詞が現在分詞におかれている場合、現在分詞が「入射的視点」による未完了アスペクトをあらわす、という本稿の仮説とは矛盾しないのであろうか。

- (94) Nul ne peut échapper à son destin et celui des possesseurs de l'Inde a toujours été d'être dépossédés par des **gens venant de** l'Asie centrale, comme, dans le cours des siècles, nous le montre l'histoire du Turkestan.

(A. Durrieux et R. Fauvelle, *Samarkand, la bien gardée*, p.288)
 なにもものも運命からのがれることはできない。インドの持てる者たちの運命は、いつも、中央アジアから来たひとびとに篡奪されることであった。それはちょうど、何世紀ものあいだ、トゥルケスタンの歴史が示すとおりである。

こうした例に関しては、たしかに、事態そのもののアスペクトとしては瞬間相であり、完了相であることは当然のことであるが、しかし、もはや事態そのもののアスペクトが問題になっているわけではない、と考えることができる。ここでは、現在分詞句 *venant de l'Asie centrale* は、*des gens* に属性付与をしているのであり、その属性を介して、状態的に機能しているのである。たとえ現在分詞が指示している事態そのものは完了的であっても、まさに付加語的であること自体によって、現在分詞はある種の状態性を獲得するに至っている、ということである。このことは、春木 (2000) が問題にしている、関係節中での半過去の使用の特徴とあい通じることである。春木 (2000) は、つぎのふたつの例文をひきながら、あとの (97) のように言っている。

- (95) J'ai rencontré un réfugié qui **arrivait** du Kosovo. (春木 2000, p.85)
 コソヴォからの (「コソヴォから到着した」) 難民に出会った。
- (96) Louis Gillet, qui **mourait** à Paris le 1^{er} juillet, a laissé une oeuvre considérable. (Sten 1952, p.130, cité dans 春木, *ad loc.*)
 6月1日にパリで亡くなったルイ・ジレは、かなりの作品を残した。
- (97) 「[(95)] や [(96)] のような例では, arriver や mourir といった完了の事態によって対象を特徴づける手段として, 関係節と半過去が用いられていると考えられる。関係節というのは, 非制限的な場合は別として, 先行詞をヘッドとする名詞句の構成要素であり, 統語的にもすぐれて名詞句に依存・従属している要素であり, 同じ属性付与という働きをする場合でも <主語-述部> という構造以上に属性付与が前面に出てくる構造である。」 (*ibidem*, p.86)

付加語的な現在分詞が, 原則として関係節で言いかえられる¹⁶ こと, そして, 関係節と同様に, 「すぐれて名詞句に依存・従属している要素」であることを想起するなら, この記述は, そのまま付加語的な現在分詞にも適用可能であると思われる。付加語的な現在分詞も, それが従属する名詞 (句) に対する属性付与を行なっているのであり, その際, 現在分詞におかれた動詞の事行は, 属性としてとらえかえされているのである。いったん属性としてとらえられると, それはもはや事態としてではなく, ある種の状態のように扱われるのである。状態はいうまでもなく未完了相であり, 現在分詞が未完了相をあらわすことと合致している。

5.3.3. つぎに, 文頭遊離の位置におかれた現在分詞に関してはどうかであろうか。これについては, ふたつの場合にわけることができるように思われる。

5.3.3.1. 主節であらわされる事態と同時であり, その事態の背景 (arrière-plan または fond de décor) をなすような事行をあらわす場合。

- (98) [文脈: リヨンのひとは近所づきあいを好まない] Il voit beaucoup de gens, s'occupe de beaucoup de choses, et le soir, il n'a plus envie de voir des gens de la maison. **Étant** très bon Lyonnais, il n'a pas du

tout l'idée qu'on peut avoir envie d'accueillir.

(Y. Grafmeyer, *Habiter Lyon : milieux et quartiers
du centre-ville*, p.70)

彼は多くのひとに会い、多くのしごとをしているので、夜になるともう、家でつきあうひとたちと会いたくもなくなる。まっとうなりyon人なので、彼は、ひとを家に迎えたいなどはまったく思いつきもしない。

このような場合は、未完了アスペクト説からの説明が、比較的たやすくできる事例である。入射的視点をあらわす半過去が、背景をあらわす時制であることを思いおこそう。たとえば、ゾラの『居酒屋』の劈頭にほど近い、つぎの例をみよう。

- (99) Quand Gervaise **s'éveilla**, vers cinq heures, raidie, les reins brisés, elle **éclata** en sanglots. Lantier n'était pas rentré. Pour la première fois, il **découchait**. Elle **resta** assise au bord du lit, sous le lambeau de perse déteinte qui **tombait** de la flèche attachée au plafond par une ficelle. Et, lentement, de ses yeux voilés de larmes, elle **faisait** le tour de la misérable chambre garnie, meublée d'une commode de noyer dont un tiroir **manquait**, de trois chaises de paille et d'une petite table grasseuse, sur laquelle **traînait** un pot à eau ébréché.

(Zola, *L'Assomoir*, p.2; 斜字が単純過去, 太字が半過去)

ジェルヴェーズが5時ころに目覚めたとき、からだがかわばって、腰が痛く、わっと泣き出した。ランティエはもどっていなかったのだ。彼ははじめて外泊したのだ。彼女はベッドのふちにすわったままだった。ベッドは天井にひもでとりつけられた矢につるされた、色あせたペルシャ布の下にあった。そして、ゆっくりと、涙にぬれた目で、彼女は家具つきのみすぼらしい寝室を見まわすのだった。部屋には、ひきだしがひとつ欠けている、くるみ材のたんすと、籐のいすが3つ、そして油ぎったテーブルがひとつあった。テーブルのうえには、角のかけた水瓶がころがっていた。(実線下線部が単純過去, 破線下線部が半過去)

- (99) において、物語のおもな筋となるできごと（これを前景 (premier

plan) という) は単純過去で表現されているのに対して、半過去で表現されているのは、筋となるできごとの背景になる事行であることがわかる。前半では、半過去は、ジェルヴェーズが目ざめて泣きだした理由を、背景として提示している¹⁷。そして後半では、半過去は、ジェルヴェーズのようす、そして寝室のようすを、物語の背景として描写する機能を果たしている。半過去のもつこのような背景描写の機能は、半過去の未完了アスペクトによって説明される。そもそも背景というものは、それ自体を直視するものではなく、おまな筋をみてゆくなかで自然に目に入ってくるような性質のものである。したがって、その全貌を視野におさめるのではなく、入射的視点によってみるものなのである。

(98) にもどると、現在分詞句 *étant très bon Lyonnais* によって示されていることは、主節でのべられている、彼がひとを家に迎えたいとは思ひもしないことの背景をなす理由として理解できるのであり、その理由を、背景であるがゆえに、入射的視点によってみていることを現在分詞で示している、というように説明ができる。もちろん、(98) にあらわれている前景・背景は、1文内のことであるので、(99) のような物語のなかと同じくらいには明白ではない。しかしながら、つぎの 5.3.3.2. の場合でわかるように、一見したところでは単純過去の連鎖と同様に思える場合でさえ、できごとの重要度という観点からは、やはり前景・背景の関係が見てとれるのである。

5.3.3.2. 主節であらわされる事態に先行する事態をあらわす場合。

- (100) **Trébouchant** sur le bord de la pelouse, Wolf se rattrapa à Foravril.
 (Vian, cité dans Gettrup 1977, p.256)
 芝生のへりですまづいて、ヴォルフはフォラヴリルに取りすがった。

現在分詞未完了アスペクト説でこうした事例を説明することが、すくなくとも一見したところでは困難なのは、いずれも、現在分詞句が、事態そのものの性質としては完了相のできごとを示しているからである。つぎの (101) のように、連続した単純過去で言いかえても、その文自体は自然なものになる。

- (101) Wolf **tréboucha** sur le bord de la pelouse. Il se rattrapa à Foravril.

ヴォルフは芝生のへりでつまづいた。フォラヴリルに取りすがった。

しかし、単純過去との比較がなりたつのは、あくまでも見かけ上のことである。実際には、もとの文の(100)では、主節でのべられているできごとのほうが、現在分詞句でのべられていることより、重要度が高いできごとである。そのため、(101)による言いかえは、前景・背景の関係という点からいうと、もとの文で言いあらわされている関係と少しちがっていると思われる。(100)における前景・背景の関係をより正しく映しているのは、ここでもやはり、半過去をもちいた(102)のような言いかえではなからうか。

(102) Wolf se rattrapa à Foravril. Il **trébouchait** sur le bord de la pelouse.

ヴォルフはフォラヴリルに取りすがった。芝生のへりでつまづいたのだ。

(102)の半過去は、ときに「説明の半過去」(imparfait d'explication)¹⁸とよばれる用法であるが、より根柢的には、あるできごとに対する理由などの説明が、背景として入射の視点によってみられるものであることが基盤になっている。このようなことから、現在分詞が、主節であらわされる事態に先行する事態をあらわす場合も、背景を示すという点を介して、未完了アスペクト説によって説明がつくのである。

5.3.4. 最後に、絶対分詞構文について考えてみよう。これについては、概念的な前後関係に重きがおかれる場合と、時間的な前後関係に重きがおかれる場合のふたつに大きくわけて論じてゆきたい。ただしそれらは相互排他的な分類ではなく、相対的にどちらに重点がかかっているかに着目したものである。

5.3.4.1. 概念的な前後関係(すなわち原因・理由から帰結への移行)に重きがおかれる場合で、一般的な理由などをあらわすもの。

(103) [= (5)] **La nuit tombant** assez vite, même à Rome, en cette saison, vous rentrerez tôt chez elle [...]

この場合もまた、現在分詞句によって示されている理由が、主節で示されている事態の背景としてとらえられているということから説明がつく。現在分詞が標示する入射的視点は、すでに述べたように、背景を表現するのに適しているのである。

5.3.4.2. 時間的な前後関係に重きがおかれる場合で、継起関係が認められる場合。

- (104) On connaît la suite : Grappin **fermant** Nanterre pour mâter [*sic*] les « enragés », ceux-ci **envahissant** la Sorbonne, le recteur Roche **appelant** la police. Les étudiants évacuèrent la Sorbonne et un grand nombre furent arrêtés à la sortie.

(S. de Beauvoir, *Tout compte fait*, p.469)¹⁹

そのあとのことは知られている。グラパンが「過激派」をしずめるためパリ大学ナンテール校を閉鎖し、「過激派」はソルボンヌを占拠し、ロッシュ学区長は警察を呼んだ。学生たちはソルボンヌを明け渡したが、出口で多くが逮捕された。

この例は、時間軸にそって展開される語りのながれのなかで、継起するできごとが、Grappin **fermant...** ceux-ci **envahissant...** le recteur Roche **appelant** というように、3つの絶対分詞構文で順に示されているのであり、さらにはそのあとの、Les étudiants **évacuèrent...** un grand nombre **furent arrêtés...** という単純過去による継起的なできごとの語りへと続いていっている。全体を単純過去で、

- (104') Grappin **ferma** Nanterre pour mater les « enragés », ceux-ci **envahissèrent** la Sorbonne, le recteur Roche **appela** la police. Les étudiants **évacuèrent** la Sorbonne et un grand nombre **furent** arrêtés à la sortie.

と言いかえても、それ自体はまったく自然な連鎖である。したがって、この例もまた、事態そのものの特性としては完了相の例であり、一見したところでは、未完了アスペクト説では説明が困難な例のように思えるかもしれない。

しかし、(104') が自然な文であるからといって、やはり、(104) とまったく同じというわけではない。(104') はそれぞれのできごとを、その全体を一挙にとらえる「総覧的視点」(cf. (80)) でとらえた例であるのに対して、(104) で現在分詞が連鎖する部分は、あくまでも、それぞれの事態を「入射的視点」でとらえたものなのである。つまり、5.2.1 節でふれた「絵画的半過去」が、本来なら完了相の時制で語られるはずの事態を、ことさらにその内側からとらえようとするところから、ひとつひとつの動作をスローモーションのようにえがき出すことになるのと同様に、(104) も、1968年5月革命の帰趨をさだめる重要なできごとに意味づけをあたえる効果を出しているのである。

以上、この5.3 節では、現在分詞のさまざまな用法へと観察の対象をひろげることにより、未完了アスペクト説を検討してきたが、総じて半過去の機能との類縁性が確認された²⁰。半過去こそは、入射的視点による未完了アスペクトを標示する時制の最たるものであり、それとの類似性を手がかりとすることで、現在分詞が未完了アスペクトを標示するという本稿の仮説が多岐にわたる用法を説明しうることが確認できたと思われる。

6. ジェロンディフの機能について

以下では、ジェロンディフの機能について考察する。

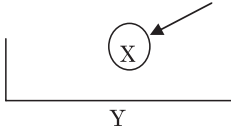
6.1. 「容器のメタファー」説とその難点

ジェロンディフの機能に関する議論のなかで、おもに Kindt (1999)、武本 (2004) (ただし武本 (2004) は容器のメタファーをそのまま維持するのではなく、より抽象化した「セッティング」の概念を用いている) が用いている、「容器のメタファー」の概念を検討してみたい。

「容器のメタファー」とは、大略つぎのような考えかたである。認知論的に、図 (Figure) と地 (Ground) では、後者のほうが大きく、包含的である。すなわち、「地」が「図」をふくみ込む容器としてとらえられる、ということである。ジェロンディフ論に適用すると、主節は「図」をあらわし、ジェロンディフ句は「地」をあらわす。その包含関係は、ふたつの動詞の事行が展開する時間的インターヴァルどうしの包含関係に反映すると考えることができる。< X en Y > あるいは < En Y, X > (ここでは、いずれも X を主節、en Y をジェロンディフ句とする) における X と Y の関係は、本稿筆者の解釈によって図示すると、つぎの (105)

のように、Y が容器 (contenant), X が内容物 (contenu) という関係になっているとするのである。

(105)



認知言語学においてこの考えかたを明らかにしたのは Talmy (1978) であり、つぎのような原則を提案している。

(106) **Figure-Ground Alignment Principle** (Talmy 1978, p.640)

« A larger, temporally containing event acts as Ground (in the subordinate clause) with respect to a contained event as Figure (in the main clause). » (内容物となるできごとが (主節において) 「図」 となるのに対して、より大きい、時間的に容器となるできごとが (従属節において) 「地」 としてふるまう)

こうした考えかたの延長線上で、Kindt (1999) はつぎのように主張している。

(107) « le champ temporel recouvert par *en* + GV est au moins identique au champs recouvert par P ou peut être plus grand »

(Kindt 1999, p.114)

(*en* + GV によって占められる時間帯は、みじかくても P によって占められる時間帯と同じであり、それより長いこともありうる。[ただし GV は *groupe verbal* (動詞句), P は主節動詞によってあらわされる事行])

たとえば、(108) の場合は、*en chantant* が占める時間帯と、*il travaille* が占める時間帯とが重なりあっているとす。 (108) の例文以下の定式と図も Kindt によるものである。そこでは、*en chantant* が占める時間帯が T (*en* + GV) であらわされているが、それは *chanter* が占める時間帯 T (GV) と同

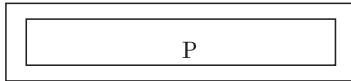
じであり、その時間帯のなかに il travaille, すなわち P が内容物として含まれる, ということである。

(108) Il travaille **en chantant**. (*idem*)

かれは歌いながら仕事をしている。

T (GV) : chanter, T (en + GV) : chanter

T (en + GV) = T (GV)



しかし、以上の考えかただけでは処理にこまるのが (109) のような例である。(109) の例文以下の定式と図も Kindt によるものであるが、この場合は、poster が占める時間帯 T (GV) と en postant が占める時間帯 T (en + GV) がことになっており、後者は前者の結果状態になるということである。このような場合には、en のはたらきにより、GV から出てくる結果状態がみちびき出され、それが容器にされるという。そして、その結果状態のなかに主動詞の事行 P が内容物としておさめられるとする。

(109) **En postant** la lettre maintenant, tu atteindras le directeur à temps. (*idem*)

いま手紙を投函すれば、期限内に部長のところに着くよ。

T (GV) : poster la lettre,

T (en + GV) : poster la lettre + la situation qui en résulte

en + GV



ところが、以上のような Kindt (1999) の説明には、明らかに問題点がある。まず、(109) のような場合、なぜ結果状態を想定できるのか、poster のような瞬間相の動詞であれば結果状態を想定するしかないというのであれば、なぜその機能を en が担うといえるのか、という疑問に明確にこたえられない。それだけではなく、たとえ en + GV が GV の結果状態をあらわすという Kindt

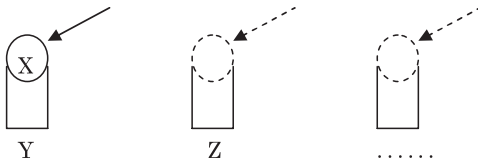
(1999)の主張をそのまま受けいれてもなお、「容器のメタファー」だけでは、扱いはない反例が出る。すなわち、X en Yにおいて、「Yであらわされる時間帯にXであらわされる時間帯が包含される」と解すると、Yが瞬間相で、かつen Yが結果状態をあらわさない場合を扱えないことになる。たとえば(110)は、むしろ主節で述べられているj'étais presque décidé...という状態のほうが、時間帯でいえば大きく、包含的であると解するほかない。

- (110) **En me couchant**, j'étais presque décidé à prendre dès l'aube un train pour Lille. (Bernanos, cité dans Gettrup 1977, p.234)
 就床するとき、わたしは夜が明けるとすぐにリールにむかう列車に乗る決心がほとんどついていた。

6.2. 「容器のメタファー」説に対する代案

ここで、このような不都合を回避できる本稿筆者の代案をひとつ提出したい。それは、en Yを、(111)の図にみるように、そのたびごとに可変的な落ちつき場所として、en Y, en Z, ... というような範列をなしていると考えられるというものである。そうすれば、かならずしもYがXより大きい必要はなくなる。

(111)



この考えかたの根柢にあるのは、もともと前置詞enにも、可変的な修飾をみちびく用法があるということである。たとえば、つぎのような例がそれにあたる。

- (112) **En allemand, en batave, en italien ou en égyptien**, c'est toujours elle, éternellement actuelle ; notre Dalida nationale brille toujours au firmament des superstars.

(Le Monde, cité dans Franckel 1989, p.288)

ドイツ語で歌っても、バタヴィア語で歌っても、イタリア語で歌っても、エジプトアラビア語で歌っても、いつでも彼女は変わらない。永遠に現在的なのだ。われらの国民的歌手ダリダは、いつもスーパースターの天空にかがやいている。

- (113) Une jolie fleur dans une peau de vache
 une jolie vache déguisée **en** fleur (G. Brassens, *Une jolie fleur*)
 牝牛の皮の下に、かわいい花がある
 かわいい牝牛が、花に扮している
- (114) Il a agi **en** roi. (Gougenheim 1950, p.183)
 彼は王のようにふるまった。
- (115) Il est mort **en** brave. (*idem*) 彼は勇者として死んだ。

順に確認しておくと、(112) では、歌手ダリダがどの言語で歌うかは、場合ごとに、あるいは曲ごとに変わってくることである。ここでは、それらの可変的な定位を、en + 言語名で示している。(113) では、牝牛が花に扮するのは、ほんらい牝牛であるものが、あくまでも扮装として花になっているという一時性がみられる（なお、この例は dans と en の対比が顕著にみられる貴重な例である。6.4 節で論じる）。(114), (115) はいずれも、il a agi, il est mort といった動詞であらわされる状況において、主語の il であらわされる人物が、roi, brave としての役割 (roi に関しては、「王のような」という隠喩的な派生もみられる) を演じているということであり、あくまでも問題となる状況の内部で有効となる特徴づけがなされているといえる。また、en 以下にくる名詞に関しては、(112) においては顕在的に (en allemand, en batave...), (113) ~ (115) に関しては言いあらわされた以外の可能性と潜在的に範列が形成されていると考えられ、(111) の考えかたと合致する。

これらの例を下敷きにして (110) をみなおすと、就床時という局所的な定位先 (時の副詞句であるかぎり「一時的」なのは当然であるが、より一般的にも、「かずある状況のうちの就床時」という局所性がみとめられる) に主動詞の事行を位置づけていると考えられるのではないか。この考えかたは、次節 6.3 でみるように、状態変化を想定するとジェロンディフの容認可能性が向上するという事実とも符合することになり、ジェロンディフの性質をうまく説明できると思われる。

また、4.2.3 節で確認した、ジェロンディフが「時間的定位」をあらわす場

合に適しているという事実も、(111) の図式と合致しているといえる。

6.3. 「定位」(repère) 説

以上で端緒を示したジェロンディフの機能のとらえかたを展開してゆくまえに、先行研究のなかには、「容器のメタファー」とは逆方向の説も存在することをみておきたい。それは、Gettrup (1977), Franckel (1989), Franckel et Lebaud (1991), 春木 (1991) らが提出している説であるが、「容器のメタファー」で仮定されていた容器・内容物の関係を逆転させ、ジェロンディフ句が定位(repère)の解釈をうけるためには、ジェロンディフ句によって瞬間相の状況が示されていなければならないとしているのである。

Franckel (1989, pp.177-178)によると、(116), (117), (119) のような状態述語(Franckel の用語でいうと「集密的な」(compact) 述語)は、そのままでは定位解釈のジェロンディフをつくることができない。しかし、(117)に対して(118), (119)に対して(120)のように、瞬間的かつ1回限りの事態の生起をあらわす述語(Franckel の用語でいうと「離散的な」(discret) 述語)を入れかえると、容認度が改善する。

(116) ?? **En ayant** beaucoup de courage, il est sorti. (*ibidem*, p. 177)

? 多くの勇気をもって、彼は出かけた。

(117) ? **En ayant** beaucoup d'argent, on se crée beaucoup de faux amis.

(*idem*)

金を多くもっていると、多くのにせの友だちができる。

(118) **En gagnant** beaucoup d'argent, on se crée beaucoup de faux amis. (*ibidem*, p.178)

金を多くかせぐと、多くのにせの友だちができる。

(119) ? **En étant** désagréable avec tout le monde, il s'est isolé.

(*ibidem*, p.177)

みんなに対して不愉快であることで、彼は孤立した。

(120) **En se rendant** désagréable avec tout le monde, il s'est isolé.

(*ibidem*, p.178)

みんなに対して不愉快になることで、彼は孤立した。

以上のようなことから、Franckel (1989) は、つぎのような一般化をしている。

- (121) « entre deux verbes dont l'un réfère en particulier à un franchissement de frontière et peut être, à ce titre, qualifié de notionnellement discret (par exemple *sortir*, *franchir*, *arriver*, *réussir*) et l'autre qui se présente comme un compact, c'est le premier qui, au niveau des relations primitives, tend à fonctionner comme repère du second » (*idem*)

(とくに境界の乗りこえをしめす, したがって, 概念的に「離散」とみなされうる動詞 (*sortir*, *franchir*, *arriver*, *réussir* など) と, 「集密」として立ちあらわれる動詞とのあいだでは, 原初的關係としては, 前者のほうが後者の定位先となる傾向にある。)

この (121) の一般化は, (106) でみた Talmy の原則とは, まったく正反対のことを言っていることがわかる。しかし, (116) ~ (120) のような現象がある以上, すくなくともフランス語のジェロンディフを問題とするかぎりでは, 「定位」説のほうが言語的な根拠のある議論であると考えざるを得ない。

ちなみに, ジェロンディフにかぎらず, *quand* 節でも未完了の述語をもちいることには制約がある。このことから, むしろ瞬間相であることこそが, 時間的・概念的定位としての解釈が可能になるための条件であると考えられるのではなかろうか。

- (122) ?? **Quand je me promenais** dans la forêt, j'ai vu un ours.

(岩田 1997, p.67)

森を散歩しているとき, 熊をみた。

以上でみてきた制約に加えて, 4.1.2 節でみた, 起動相解釈でジェロンディフの容認可能性が向上することと, 4.1.5 節で確認した状態動詞に対する制約を思いおこそう。これらの制約を総合するなら, なんらかの状態変化があることが, 定位としてのジェロンディフの使用を容易にする, ということである。そして, 状態変化とジェロンディフによる定位の親和性は, 6.2 節の (111) に即していえば, *en Y* が恒常的ではなく可変的な定位をあらわすということとつながっているのである。

これまでみてきた事実は, いずれも, 「容器のメタファー」が, すくなく

とも素朴な形では維持できないことを示していると思われる。そうではなくて、Franckel (1989)、春木 (1991) のいう「位置づけ」や、武本 (2003) の「セッティング」のように、抽象的・概念的な定位操作を考えなければならない。そこで参考にしたいのが、前置詞 *en* の特質である。

6.4. 前置詞 *en* による位置づけの特質

前置詞 *en* の研究の古典、Guillaume (1919, rééd. 1975) と、それにつづくいくつかの研究を参照しよう。

- (123) « Ces deux prépositions nous mettent en présence d'un fait entièrement nouveau : la déformation de la fonction, au lieu d'être une variation d'une valeur que rien d'extérieur ne révèle, se dénonce, au contraire, par un changement de forme apparente. *En* est, en effet, dans la langue, la valeur déformée (ou asymétrique) de *dans*. » (*ibidem*, pp.255-256)

(これらふたつの前置詞は、まったく新しい事実にわれわれを立ちあわせる。機能の変形が、明白な形式の変化によって告げられているのである。それは、外部のなにもものも明らかにしてくれない、ひとつの価値の変異というわけではない。実際、*en* はラングにおいて [= 本質的に] *dans* の変形された (あるいは非対称的な) 価値である)

ここで Guillaume は、「変形」という興味深い概念を用いて、*dans* と *en* の機能の相違を説明しようとしている。< X *dans* Y > (ここでは、Y を前置詞がみちびく項、X を前置詞が関係づける第2の項 (たとえば、主語など) とする) が、X を Y へと位置づけるという、いわば、通常の方向性による位置づけの標示であるとすれば、< X *en* Y > は、それが「変形」をこうむった、特異な位置づけを標示する、と言っているのである。それはどのようなものか。もうひとつの引用で確認しよう。

- (124) « La révolution dans la forme de la fonction marquée par le passage de *dans* à *en* trouve sa représentation intégrale dans une phrase comme *un livre qu'on jette dans le feu ne tarde pas à être en feu*, où l'on voit deux natures (*livre* et *feu*) d'abord externes

l'un à l'autre, prendre position si intimement l'un dans l'autre qu' à partir d'un certain moment l'une est l'autre. » (*ibidem*, p.267)

(dans から en への移行によって示される機能の形式の変化は, *un livre qu'on jette dans le feu ne tarde pas à être en feu* (火のなかに投げられた本は, ほどなく, 燃える (火だるまになった) 本になる) という文にその全体的表象をみいだす。まず互いに外部になるふたつの実体 (本と火) があり, 本が火のなかにあまりにも密接に入り込んでゆくので, ある時点から, 本が火そのものになるのである)

このくだりについては, Franckel (1989) がつぎのように解説している。

- (125) « [en] oriente une relation d'intériorisation du N1 intériorisant-repère vers le N2 intériorisé-repéré. Selon une direction opposée à celle que détermine *dans*, du N2 repère intériorisant au N1 repère [ce serait plutôt : *repéré*, n.d.a.] intériorisé. » (*ibidem*, p.169)
 ([en は] 内部化する・定位先である N1 から, 内部化される・被定位項である N2 へと向かう内部化の関係を方向づける。それは, *dans* が規定する方向とは逆方向である。*dans* の場合は, 内部化する・定位先である N2 から, 内部化される・定位先である [被定位項の誤りであろう; 渡邊註] N1 へとという方向である。)

すなわち, en は dans とは逆方向の定位操作をあらわしているのであり, 本稿筆者の解釈で図解すると, つぎの (126), (127) のようになる。

(126)	N1 en N2	(127)	N1 dans N2
	feu livre		feu livre
	N1 → N2		N1 ← N2
	repère repéré		repéré repère
	定位先 被定位項		被定位項 定位先

un livre **en** feu (燃える (火だるまになった) 本) のような例においては, 火が本と不分明になるほどに本を覆いつくし, 認知的には, Guillaume の引用 (124) がいうように, 「本が火そのものになる」のであり, 前置詞 en によ

る結合は、両方の項を融合させるほどの、きわめて密接なものであることがわかる。

ふたつの前置詞の機能の対比を読みとることができる、つぎの例を再度考えてみよう。

- (128) [= (113)] Une jolie fleur **dans** une peau de vache
une jolie vache déguisée **en** fleur

Une jolie fleur **dans** une peau de vache では、牝牛のなかに、隠喩的ながら異質の要素として「花」と解することができるものがみてとれる、と言っているのに対し、une jolie vache déguisée **en** fleur では、扮装によって牝牛が、ある意味で花そのものと不分明なまでに同質の存在になっていると言っているのである。

ここで、前置詞 en による結合の密接さを強調したことと、6.2 節で「可変的」な位置づけであるという説を提出したこととの整合性はあるのか、という反問が予想される。それに答えるべく、つぎの (129) と (130)、(131) と (132) の対比を例にとってみよう。

- (129) Il est **en** mer. (Franckel et Lebaud 1991, p.59)
彼 / それ (船員, 漁師, 船など) は海にいる / ある。
(130) La bouteille est **à** la mer (*idem*) 瓶は海上にある。
(131) Il est **en** prison. (Franckel 1989, p.170) 彼 (囚人) は服役している。
(132) Il est **dans** le prison. (*idem*) 彼 (刑務官, 庭師など) は刑務所にいる。

たとえば (129) では、en mer という前置詞句と関連づけられるのは、船員、漁師、船など、「内在的に海に関連する性質をおびた辞項」(« terme intrinsèquement pourvu de propriétés « maritimes » », Franckel et Lebaud 1991, p.59) である。また、(131) では、en prison ということによって、prison (刑務所) というものに本来的な機能である「収監」という解釈のみが活性化されるのに対し、(132) の dans はそのようなことがなく、il で示されたひとがなんらかの理由で刑務所にいればよい、ということになる。

とはいえ、(129) において il で指示される漁師や船員が海上で過ごす時間も、(131) において il で指示される囚人が刑務所で過ごす時期も、基本的に

は限られた時間や時期なのであり、同じ主体がことなる位置づけをこうむる可能性は、潜在的にせよ、顕在的にせよ、範列として存在する。6.2 節で「可変的」といったのはこのレベルでの可変性の問題であり、ひとたび位置づけがなされれば、en によって結びつけられるふたつの辞項の性質を密接に関連させたうえでの解釈が要求されるのである。それらふたつのレベルを区別して考えれば、結合の密接さと、可変性とは、矛盾するものではないことがわかる。

これまでの例からわかるように、en は主語（などの、それが関係づける第2の項）とのかかわりでしか解釈できないような前置詞句をみちびくのである。このことと、ジェロンディフの主節への密接な関連は、平行的にとらえることができる。つぎの例を再度参照されたい。

(133) [= (61)] Il voyageait **en prenant** des photos.

(134) [= (62)] Il voyageait, **prenant** des photos.

この密接さは、結局、ジェロンディフ句が主節の命題の一部として包摂され、融合することを意味する。すなわち、ジェロンディフ句は、多くの場合、状況補語的な特徴を帯びる。このことを示そうとしたのが、Kleiber (2007) (2009) による、avec との類縁性をたてる論である。

6.5. 前置詞 avec との類縁性

以下では、Kleiber (2007) (2009) のおもな主張を簡単に確認しておきたい。Kleiber の説によると、ジェロンディフは avec 前置詞句の動詞における対応物である。図式的には、つぎのようになる。

(135) **en—ant + V** \approx **avec + SN ou N**²¹ (Kleiber 2007, p.115)

それでは、avec の機能とはどのようなものか。Kleiber (2007) は、Lemaire (1997) のつぎのくだりを引用して、

(136) « En français, *avec*, qui marque des compléments de manière, accompagnement, concomitance, et non pas seulement d'instrument, n'a sans doute comme valeur propre (...) que celle d'une simple association. »

(Lemaréchal 1997, cité dans Kleiber 2007, p.119)
 (フランス語では avec は、道具だけでなく、様態、随伴、併存性を
 あらわすので、おそらく単なる結合しか固有の価値をもたない。)

こうした分析はジェロンディフにも通じるものであるとする。ジェロンディフ
 がおこなう結合は、等位的なものではなく、状況補語として主節に従属するも
 のであるが、どのような状況補語なのかという点は未決定 (sous-déterminé)
 であるといっている。主節とジェロンディフ句とのあいだの具体的な関係をさ
 だめるには、両者の動詞の語彙内在的な性質に依存せざるをえない。Kleiber
 は、つぎのような例を引いている。

- (137) Je me rase en chantant. (Kleiber 2007, p.97)
 わたしは歌いながらひげをそる。(様態)
 (138) Je chante en me rasant. (*idem*)
 わたしはひげをそるとき歌う。(時間的定位)²²

これらの解釈は、つぎのようなふたつのタイプの問答で確認できるとする。

- (139) Quand chantes-tu ? — En me rasant. (Kleiber 2009, p.12)²³
 いつ歌うの? — ひげをそるとき。
 (140) Comment chantes-tu ? — ? En me rasant. (*idem*)
 どんなふうに歌うの? — ? ひげをそりながら。
 (141) Quand te rases-tu ? — ? En chantant. (*idem*)
 いつひげをそるの? — ? 歌うとき。
 (142) Comment te rases-tu ? — En chantant. (*idem*)
 どんなふうにひげをそるの? — 歌いながら。

こうした関係が出てくるのは、chanter (歌う) という行為と se raser (ひ
 げをそる) という行為のあいだに本来的に存在する非対称性のゆえである。す
 なわち、chanter は se raser に付随する二次的の行為として解され、se raser の
 ほうが chanter を位置づける時間的的定位になるのである。一般化として、つ
 ぎのような規則を仮定している。

- (143) « Si une activité W est une manière possible d'une activité Z, alors W au gérondif ne peut être repère temporel pour Z, comme Z au gérondif peut l'être pour W. » (Kleiber 2007, p.123)
 (行為 W が行為 Z の可能な様態であれば、ジェロンディフにおかれた W は Z の時間的的定位にはなりえない。しかし、Z が W の時間的的定位になることはできる)

つぎに、Kleiber (2009) では、ジェロンディフの数ある状況補語的な解釈のなかでも、なぜ結果(時間的・論理的な後続性)の解釈のみがむずかしいのか、ということの問題にしている。とりわけ、ジェロンディフの詳細な解釈は「未決定」であるはずなのに、ここにだけ制約があるのは謎めいている、という問題意識である。

たとえば、つぎのふたつの例はきわめて自然な例である。

- (144) Paul est tombé **en glissant** sur une peau de banane. (*ibidem*, p.10)
 ポールはバナナの皮の上で滑ってころんだ。
 (145) Paul a fêlé la carafe **en la heurtant** contre l'évier. (*idem*)
 ポールは水入れを流しにぶつけて欠いた。

それに対して、ジェロンディフ句と主節を置換したつぎの例は解釈困難である。

- (146) ^(?) Paul a glissé sur une peau de banane en tombant.
 (147) [?] Paul a heurté la carafe contre l'évier en la fêlant.

(146) でかろうじて可能なのは、時間的定位の解釈(「ポールが転んだときは、バナナの皮の上で滑ったのだ」)である。また、(147) は時間的定位の解釈も不自然であるという。

この制約について、Kleiber (2009) は、まさしく上述の、「ジェロンディフ句が状況補語として主節に従属するものであるということを決まっているものの、どのような状況補語なのかという点は未決定である」ということに原因を求める。すなわち、

- (148) « [...] la relation sémantique qu'il [=le gérondif] contribue ainsi à établir doit être disponible, d'une manière ou d'une autre, dans la prédication-hôte qui accueille le gérondif. » (Kleiber 2009, p.20)
 (ジェロンドィフがうちたてる意味関係は、ジェロンドィフをむかえ入れる主節においてなんらかの形で利用可能 (disponible) になっていなければならない。)

そのことから、後続性の関係をたてることが禁じられることが理解できるという。論理的な先行性 (条件, 原因) とちがって、後続性は問題となる叙述において予見可能なものではない。因果関係, 条件・帰結の関係において、つねに原因や条件が結果や帰結に対する状況補語としてあらわれるのであり、逆ではない。

ジェロンドィフが命題 « Paul a fêlé la carafe » に適用できないのは、命題 « Paul a heurté la carafe contre l'évier » がその結果を含意しないからである。一方、ジェロンドィフが « Paul a fêlé la carafe » に適用される場合は、主節の述語は、その意味作用からして、「原因」を予見するのであり、ジェロンドィフ句の語彙の意味はそれにうまく適合し、因果関係が構築されるとする。

以上でみてきた Kleiber (2007) (2009) の論は、状況補語というレベルを指摘しているところは重要である。「命題に随伴する状況補語」という意味での主節との緊密さを、ジェロンドィフをみちびく *en* が標示していると考えるならば、Franckel (1989)、春木 (1991) などの、*en* が「位置づけ」をあらわすという説とも整合的である。

しかしながら、問題点がないわけではない。第1に、ジェロンドィフを *avec* 前置詞句の動詞版であるとする説は、Kleiber 自身の、ジェロンドィフ単一形態素説と整合性があるのか、という問題である。いうまでもなく、*avec* は前置詞として、明確に画定できる名詞または名詞句をみちびくので、前置詞句全体としては、けっして単一形態素ではない。その *avec* 前置詞句との類縁性をジェロンドィフに認定するということは、ジェロンドィフ単一形態素説から遠ざかることはあっても、近づくことはない。

第2に、たとえば仮定をあらわすジェロンドィフにどのように適用できるのであろうか。Kleiber は仮定用法を、時間的定位の解釈から遠くないものとしてとらえているようであるが、仮定というものは、主節への随伴要素というよりはむしろ、主節の内容を存在させる条件であるため、タイプがちがうと思

われる。たとえば、つぎのような例がそれに該当する。

- (149) [= (109)] **En postant** la lettre maintenant, tu atteindras le directeur à temps.
- (150) La situation de l'entreprise restera difficile, **en admettant** même qu'elle puisse trouver des concours financiers. (Cellard 1996, p.33)
たとえ財政的支援をみつけられると想定しても、その企業の状況は困難でありつづけるだろう。

とくに (150) の *en admettant que...* は、それ自体で意味しているのは、「que 以下のことを認めるとするなら、主節であらわされる事態を断定することになる」ということであり、明白に発話行為のレベルに属している²⁴。このことは、ほかの用法のジェロンディフが、述べられる対象となる事実のレベルに属しているのとはちがっているのである。従来の研究は、*en admettant que...* や *en supposant que...* のような例を、主節の主語とジェロンディフの主語が一致しないことから、熟語的な例外として扱っているものが多いが、本稿冒頭でも述べたように、主節と主語が一致しないジェロンディフは、かならずしも熟語的なものとして扱うことはできない。むしろ、他の例と連続的な説明をすることのほうが望ましい。

ジェロンディフ句と主節のあいだに緊密な相互依存を想定することはまったく正しいことであるが、その際、命題内要素としてとらえがたい假定用法をも説明できるような形で仮説をたてることが、ジェロンディフの理解には不可欠になるであろう。

6.6. ジェロンディフの機能

前節 6.5 のおわりで言及した假定用法の問題をひとつの端緒として、この節では、ジェロンディフの機能に関する総括的な考察をこころみたい。

上記でその特異性を述べた假定用法とならんで、もうひとつ、ジェロンディフに特徴的な用法として再度言及しておきたいのが、手段・方法をあらわす用法である。すでに 4.1 節でみたように、手段をあらわす用法は現在分詞にはなく、ジェロンディフに特徴的な用法である。

- (151) [= (59)] **En enseignant** l'anglais, il gagne sa vie.

(152) [= (60)] * **Enseignant** l'anglais, il gagne sa vie.

ジェロンディフの手段用法は、その用法をもたない現在分詞との対比でいうと、ふたつの動詞事行の関係づけを明示する前置詞 *en* があることにより、ジェロンディフにおかれた *enseigner* が手段をあらわすものとして解釈される、ということである。

ここで、「手段」というものがどのような意味をもっているか、少し考えてみる必要があるように思われる。手段に関しては、単にそれが事実として肯定されただけでは手段としては解釈されないという特殊性がある。(151)に即していうと、「英語を教える」ということが、それ自体では生活手段とはかぎらない。実際に英語を教えている、それが別の目的のみにつながっている場合もあるし、生活手段はまったく別のところにあるのかもしれない。手段という解釈は、「X (手段) によって Y (目的)」というように、明示的に関係づけられたときにはじめて出てくるような、有標の解釈なのである。その証拠に、サンスクリットなどの多くのインド・ヨーロッパ諸語が、具格 (*cas instrumental*) という、手段・方法をあらわすことに特化した格をもっており、フランス語のようにそれがすたれた言語においても、*par*, *avec* などの前置詞をはじめとする多くの表現があるのである。ここでは、(151)の例にみられるようなジェロンディフもまた、手段としての関係づけを明示するための有標の表現であると考えたい。それに対して、単なる同時性をあらわす場合には、ジェロンディフも現在分詞も許容されることからわかるように、特段の明示的な関係づけのマーカークがなくても、いわば、自然に出てきうる解釈なのである。

そのようなことから、ジェロンディフは、前置詞 *en* がふくまれていることにより、ジェロンディフにおかれた事行と主節の事行とあいだの相互依存的で密接な関係づけ、とりわけ、6.2 節、6.4 節で考えてきたような意味での「位置づけ」の操作をあらわすマーカークであると規定したい。そして、その関係づけのありかたは、もちろん、両方の動詞が元来語彙的にもっている性質、そして、それらの動詞の性質どうしの相関関係によって決まってくることは、多くの先行研究が述べているとおりであるが、ここではさらに、多様な解釈が生まれる過程をもう一歩くわしく明らかにしてみようと思う。

ロドリゲス (2006, p.115) では、実例に即した各用法の詳細な記述にもとづき、ジェロンディフの用法のなかでも、手段・方法の用法、ならびに時間的

基準点の用法にかぎって、ジェロンディフ句の事行の主体と、主節の事行の主体が別であってもかまわないこと、そして、両者の事行の共存が不完全で、継起の解釈も可能であることが指摘されている（ただし、この類に仮定の用法も加えるべきであろう）。それに対して、様態や、単なる同時性の解釈のときには、それらふたつの特徴はなくなり、ジェロンディフ句と主節の両者の事行の主体は必然的に同一であり、かつまた、両者の事行は完全に共存している（継起の解釈は不可能）であることが指摘されている。

そのことが意味することは、en によって結合される対象となるふたつの事行が、本来は結びつかないものとしてとらえられている場合と、本来両立するものとしてとらえられている場合とで、結合の意味合いが違ってくるといことである。

本来は結びつかないとみなされるふたつの事行を、いわば、「ちからづく」(coup de force)で結合している場合は、それらの事行のあいだに、ジェロンディフのなかの en によってはじめて関係が成立することになり、手段のような有標の解釈や、仮定のような外在的な解釈が出てくるのである。

それに対して、本来両立可能とみなされるふたつの事行を結合している場合は、ジェロンディフにおかれることによって、もともとあった関係がいっそう緊密な結びつきになると考えられる。それがまさに、つぎのふたつの文の相違である。

(153) [= (61)] Il voyageait **en prenant** des photos.

(154) [= (62)] Il voyageait, **prenant** des photos.

(153) では、写真をとることは、旅行することと不可分の様態のひとつとして、主節の事行に組みこまれているのに対して、(154) では、写真をとることは、旅行をすると述べたことと単に並置的に示されている事行であり、現在分詞によって、それが内部から眺められたように、いわば一場面としてえがき出されているのである。

ここまででは、ジェロンディフにふくまれる前置詞 en による位置づけについて述べてきた。どちらかという二形態素派であると称した本稿の立場からすると、残された問題としては、ジェロンディフが動詞事行を指示する構成要素として現在分詞をとっていることの意味合いについて言及しなければならない。ただ動詞事行を指示するだけならば、ほかに不定法もあるのに、なぜ現在

分詞をもちいるのか。

それについては、5.2.1 節で示した、知覚動詞の直接目的補語の属辞になるときで、不定法と現在分詞の競合が実際にみられる場合、現在分詞は「入射的視点」から事行をとらえることにより、事態を展開の最中で、内側からながめているような意味効果を生む、ということをおこそう。現在分詞がジェロンディフの構成要素として用いられることにも、こうした「入射的視点」が作用していると思われる。すなわち、ジェロンディフにおかれた事行もまた、現在分詞があらわす「入射的視点」によってとらえられているのである。そのことは、6.2 節で、「容器のメタファー」への代案として提案した、「可変的的定位」ということと関連づけられると思われる。可変的的定位というのは、そのたびごとの位置づけということであるので、事態を内部からながめる「入射的視点」とよく適合するのである。ジェロンディフが<前置詞 en + 現在分詞>という構成になっているのは、前置詞 en によってあらわされる「可変的的定位」が、現在分詞によってあらわされる「入射的視点」とよく適合するからである。

その証拠として、4.1.3 節でも少しふれるところのあった、ジェロンディフと<à + 不定法>との対比をさらに考えてみよう。

- (155) Zoé a travaillé des heures { **en regardant** / * **à regarder** } par la fenêtre. (武本 2011, p.63)
ゾエは何時間も、窓の外をながめながら仕事をした。
- (156) Zoé est restée des heures { * **en regardant** / **à regarder** } par la fenêtre. (*idem*)
ゾエは何時間も、窓の外をながめたままでいつづけた。
- (157) Paul dormait { **en ronflant** / * **à ronfler** } bruyamment. (*idem*)
ポールはうるさくいびきをかきながら眠っていた。
- (158) Paul était au lit { * **en ronflant** / **à ronfler** } bruyamment. (*idem*)
ポールはベッドのなかにおいて、うるさくいびきをかいていた。

武本 (*ad loc.*) によると、主節のあとにヴィルギュル (話しことばでは休止) をはさみず副次的な行為を示す場合、ふたつの形式のあいだには、(155)、(157) のように、主節の動詞が動態動詞であるときにはジェロンディフ、(156)、(158) のように、主節の動詞が状態動詞であるときには<à + 不定法>が適合し、逆のくみあわせは不自然である、という対比が存在する。

この事実は、本稿筆者の仮説とも整合的である。すわなち、動態動詞であるほうが、(語彙的な完了相であろうとなかろうと、ひろい意味で) なんらかの状態変化を含意しているため、前置詞 *en* がふくまれていることによって「可変的定位」をあらわすジェロンディフとの親和性が高くなるのである。それに対して、状態動詞は、静的な状態がただ継続することしかあわせないため、「可変的定位」をあらわすジェロンディフとくみあわせた場合、主動詞とジェロンディフとのあいだで不調和が生じてしまうのである。

7. おわりに

以上、本稿では、ジェロンディフと現在分詞を対比しながら、かつ現在分詞がジェロンディフの構成要素のひとつであることにも留意しながら、それらの機能について論じてきた。ジェロンディフと現在分詞という、類似した形式をあわせもつフランス語の体系は複雑であり、いうまでもなく、すべての問題を解決できたわけではないが、ふたつの形式の機能について、一定の見解をうちたてることはできたと考えている。残余の問題、とりわけ主節の主語と一致しない意味上の主語をもつジェロンディフについては、別の機会に論じたい。

註

- 1 この論文は、2007年度～2010年度科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号19520414「日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究」(研究代表者和田尚明)および2008年度～2011年度科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号20520348「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」(研究代表者渡邊淳也)の助成をうけて行なわれた研究の成果の一部である。2011年2月9日にひらかれた合同研究会でこのテーマについて発表したとき、多くの重要なコメントをくださった和田尚明さん、ならびに前段階の原稿に対して貴重なコメントをくださった青木三郎先生、川島浩一郎さん、小倉博行さん、大島義和さんに深甚なる謝意を申しそえたい。さらに指摘されうる問題点は、もちろん、ひとえに筆者に帰するべきものである。
- 2 対照研究への布石として、例文、および引用には日本語訳をつけるようにする。
- 3 単に「ジェロンディフ」というときは、< *en* + 現在分詞 > の部分のみをさすものとする。それに対して、「ジェロンディフ句」というときは、ジェロンディフにおかれた動詞が目的補語、状況補語や属辞をしたがえて形成する連辞全体をさす。たとえば、(3)の例では、*en revenant* がジェロンディフで、*en revenant du cinéma* がジェロンディフ句である。
- 4 ジェロンディフが主節の事態の経験者(明示されるときは(7)のように目的補語としてあらわれるが、とくに示されていないくても潜在している)にかかると

きに、同一主語の制約が解除される傾向があることから、経験者と発話者との視点同化の問題として考えることができると予想している。本稿では、(6)～(9)のようなケースを詳細に扱う余裕はないので、別の機会に論ずることになりたい。この問題については、さらに木内(2005)を参照。また、英語の現在分詞の類似の用法については、Uchida(2002)、早瀬(2007)(2009)を参照。

- 5 もちろん、ジェロンディフ全体としては名詞的でも形容詞的でもないが、ラテン語で *dicendo* のように奪格におかれた動名詞が、意味的にはフランス語で *en* を冠せられた現在分詞、すなわち *en ...ant* に対応していると考えられる(奪格という語尾変化と、*en* という前置詞の使用の差を閑却すればであるが)ことから、ジェロンディフはラテン語の動名詞に対応させられた。この見かたは、あとでみる De Cavalho(2003)のような、歴史的側面を重視する研究に引きつがれている。

ただし、意味的にジェロンディフに対応するラテン語が、奪格におかれた動名詞だけというわけではない。手段をあらわすジェロンディフに対応するのは奪格におかれた動名詞であるが、同時性をあらわすジェロンディフに相当するラテン語の形式は、「*Cantans venit.*」(彼は歌いながらやって来た)のように、むしろ現在分詞である。

- 6 Wilmet(1997, p.293)に、現在分詞と動詞派生形容詞のあいだの対立の網羅的なリストがある。
- 7 Torres Cacoulios(2000)によると、この言いまわしには否定的な意味があるという。その点は、つぎの(i)にみるような、同じく移動動詞をもちいたフランス語の<*aller* + 不定法>の、「異常なふるまい」(*allure extraordinaire*)をあらわす用法との比較が可能である(ただし、スペイン語には *ir / andar* という、フランス語にはない移動動詞の区別があるので、もちろん相違点も多い)。
- (i) *Oui, une voiture toute neuve. Et ce connard est allé m'emboutir une aile.*

(Larreya 2005, p.351)

そうだよ、まっさらの新車だよ。あの莫迦は、フェンダーをへこませてくれちゃったのさ。

<*aller* + 不定法>のこの用法は、*aller* が現在や半過去以外の時制におかれうるという点で、「近接未来」としての用法とはことなる。詳細については、Schrott(2001)、Larreya(2005)、川口(2006)を参照。

- 8 Barceló et Bres(2006, p.15, n.11)は、動詞 *mourir* についてのみ、「*il est mourant*」(彼は瀕死である)のような<*être* + 現在分詞>の迂言形が現存しているという。しかしこれとて、*mourant* が現在分詞なのか形容詞なのか判然としない。
- 9 ここで扱う用法に関する数少ない先行研究のひとつが Uchida(2002)である。Uchida(2002, Chapter 7: "Consequential Participle Clauses in French")は、コーパスの比較にもとづいて、英語の現在分詞の類似の用法にくらべてフランス語の現在分詞の結果用法が少ないことを指摘し、それを英語・フランス語における因果関係の表示のしかた全般の相違の一環と考えようとする意欲的研究である。
- 10 大島(2011)は、つぎの(i)～(iv)のように、

- (i) ?? Jean a appuyé sur le bouton et a ouvert la porte.
- (ii) Jean a ouvert la porte en appuyant sur le bouton.
- (iii) John pressed the button and opened the door.
- (iv) John opened the door pressing the button.

フランス語は英語ほどは等位接続文を好まず、ジェロンドィフを使うことが多いことを指摘し、その理由として、英語の分詞構文がフランス語のジェロンドィフ構文より文体的に有標であることをあげている。この現象について本稿筆者は、フランス語にはジェロンドィフと、(裸) 現在分詞のあいだの対立も存在し、それらが順に従属接続的な意味構造の標示と、並置的な意味構造の標示を分担しあっているため、後者と近い等位接続文はますます使われず、という説明をつけ加えることができると考えている。

また、Cosme (2008) は、英語、フランス語、オランダ語のコーパスの比較をおこない、オランダ語から英語、英語からフランス語へと翻訳するときには、いずれも、従属接続の事例が増加し、逆方向の翻訳においては、並置または等位接続の事例が増加していることから、これらの3つの言語のなかでの相対的な比較としては、オランダ語が並置または等位接続をもっとも好み、英語は中間に位置し、フランス語は従属接続をもっとも好む、という階梯が存在するという仮説を提案している (*ibidem*, p.95)。

しかしながら、Viney et Dalbelnet (1977) は、英語との比較で、フランス語では現在分詞よりも等位接続文のほうが好まれる、と言っており、大島 (2011) や Cosme (2008) とは逆の見解である。Viney et Dalbelnet (1977, p.148) では、

- (v) He duplicated the performance the following day, getting away with a whole chunk. (Jack London)
- という英語の文例をフランス語に訳するとき、
- (vi) Il répéta l'opération le lendemain et réussit à s'emparer d'un morceau tout entier.

という等位接続の文を用いており、フランス語は英語ほど分詞構文を用いず、等位接続を好むとしている。しかし、この Viney et Dalbelnet の説明は、フランス語の古典的な文体に依拠しているのではなかろうか。現代の報道文や小説をみているかぎりでは、結果をあらわす後置現在分詞は、むしろありふれた用法である。たとえば、Togebay (1983, vol.3, pp.62-63) はつぎのように言っている。

- (vii) « Mais, chose très caractéristique, le participe présent peut correspondre à un verbe coordonné au verbe de la principale et indiquer ainsi, en antéposition, une action qui précède celle de la principale : *Et, allumant une cigarette, il renversa la tête contre le capiton de serge* [...] Et, en postposition, le participe présent peut marquer une action qui suit celle de la principale : *Elle vint à neuf heures, frappant à la porte du bout des doigts* [...] » (しかし、たいへん特徴的なことに、現在分詞は、主節の動詞と等位におかれた動詞の役割を果たしうる。そして、(主節に対して) 前置されたときは、主節の行為に先行する行為をあらわしうる。 *Et, allumant une cigarette, il renversa la tête contre le capiton de serge* (そして、たばこをつけて、彼はサージ織りのクッションに頭をたおした) [中

略] また、後置されたときは、主節の行為に後続する行為をあらわしうる。
Elle vint à neuf heures, frappant à la porte du bout des doigts (彼女は9
 時に来て、とびらを指先でたたいた)

- 11 照応副詞・連結辞 *ainsi* の機能については、渡邊 (2001 a) を参照。
- 12 この「分割的」という用語は Guillaume 派に独特のものであり、動詞によってあらわされる事行の運動量のうち、これからなされる部分(「張力」(tension)という)と、すでに果たされた部分(「弛緩」(détension)という)との境界上に視点をおき、視点の前後にそれらふたつの部分が分割されたようにみえることからその名があたえられている。つまりは、「中間的位置」(positions médianes, Guillaume 1929, p.16) に視点をおいて事行をみているということである。
- 13 ここでは R は repère (基準点) の略号である。(80) の単純過去の場合は、基本的には基準点は事態の始点 (R1) にあるが、二次的に事態の終点 (R2) にもおかれることがあるという。それに対して、(81) の半過去の場合、(82) の複合過去の場合、基準点 (R) はひとつしかない。
- 14 Barceló et Bres (2006, pp.24sq. による [+入射] ([+ incidencel) という特徴や、「入射的アスペクト」(aspect incident) という用語は、ここでいう「入射的視点」とは逆に、事態全体を一挙にとらえるようなアスペクト(すなわち、ここで採用している用語法では「総覧的視点」にあたる)をさす用語として使われているので、注意が必要である。

なお、本稿でいう「入射的視点」は、あとでみるように、半過去や現在分詞の多くの用法においてははっきりと観察されるものであり、和田 (2007) (2009) が英語・日本語における類似の事象を扱う際に提唱している「[内]の視点」の概念と接続可能なものであると思われる。和田 (2009, pp.249-250) から以下に引用する。

- (i) 「直示的中心 (Deictic Center) である「発話状況」(話者の「いま」と「ここ」) から話者が現象 (場面) を直接捉える場合、当該現象 (場面) を話者とは離れたものとして外側から描写していれば「外」の視点を取っていることになり、当該現象 (場面) 内の人物の視点もしくは話者がその現象 (場面) 内に組み込まれた自らの視点を通して当該現象を描写していれば「内」の視点を取っていることになる。」(下線引用者)

こうした視点のとりかたは、本稿でいう「入射的視点」が、事行の中途のみを視野におさめていることから、それを内部からえがき出すということとあい通じるものであり、さらにいうと、大久保 (2007, p.3) が半過去を「(発話の場とは) 別のどこかで (発話者とは) 別の誰かが描写していること」をあらわす時制として規定し、その「別の誰か」を「二次的主体」と呼んでいることとも均質の扱いが可能であると思われる。大久保 (2007) のいう「二次的主体」とは、本稿筆者の理解では、半過去におかれた動詞事行の内部からその事行をながめる視点に対応している。

- 15 現在分詞が「入射的視点」を標示することとは対極的に、過去分詞は (82) のような「回顧的視点」、すなわち結果状態に着目するアスペクトを標示すると考えているが、本論では立ち入る余裕がないので、別の機会に論じたい。
- 16 付加語的現在分詞のすべてが関係節で言いかえられるわけではないが、いまは

- その問題に詳細に立ち入る余裕はないので、その問題を直接論じた Kindt (2003) を参照されたい。
- 17 第2文の *Lantier n'était pas rentré* は大過去であるが、助動詞 *être* が半過去におかれている意味合いは、ほかの半過去と同様に、背景的性格がみとめられる。
- 18 「説明の半過去」という用語は Le Bidois et Le Bidois (1967, t. 1, pp.434-435) による呼称であるが、こうした例では、半過去におかれた動詞の事行が直接過去に位置づけられているのではなく、その事行を発話者の理解によってとらえなおし、いったん概念化したうえで過去に位置づけている点が特徴的である。この、発話者の理解を介した、時間軸上への間接的な位置づけは、日本語学で「叙想的テンス」(寺村 1984, p.107) とされるものと似ている。そうした過程を経て、「理由」や「説明」としてとらえなおされているために、背景として入射的視点からながめられるようになり、半過去と適合するのである。
- 19 この例文はもともと Togeby (1983, vol.3, p.52) に引用されていたものであるが、Togeby は最小限しか引用していなかったので、ここでは *Tout compte fait* をひもといて、やや長めに引用した。
- 20 現在分詞と半過去の類縁性は、これまでに言及してきたほかにも、定形・非定形のちがいを超えたひろい意味での「依存性」という点にも求めることができる。Le Goffic (1995, p.133) が指摘していることであるが、「*il négeait*」(雪がふっていた)や、「*Paul roulait trop vite*」(ポールはスピードを出しすぎていたのだ)のような半過去は、それだけでは十全な解釈ができない。半過去はそれだけでは発話時空とのかかわりで事行を定位することができず、他の文脈的要素によって「繫留」(*arrimage*; Le Goffic の用語)される必要がある。このような、ひろい意味での「繫留」の必要性は、現在分詞にもみられるものである。現在分詞もまた、単独での解釈は困難であり、主節をはじめとして、関連する文脈を参照することによってはじめて、発話時空とのかかわりで事行を定位できるようになるのである。
- 21 ここではジェロンディフは *en—ant + V* と表記されている。Kleiber によるこの表記は、*en Vant* とすると、あたかも現在分詞に *en* がついたようにみえる (Kleiber の反対するジェロンディフ二形態素説) ため、不連続形態素 *en—ant* というまとまりを重視した表記であるとのことである。
- 22 日常生活のひとつの場面としてひげをそることに言及しているのではなく、たとえば話者がひげをそりながら歌うことを芸風とする歌手であれば様態解釈も可能であるが、ここではそのような特殊な場合は考慮されていない。
- 23 文例の明確さゆえに、この部分のみ Kleiber の別の論文、Kleiber (2009) から引用した。
- 24 Halmøy (2003, p.177) の用語でいうなら、「発話行為の補語となる副詞類」(*adverbial complément d'énonciation*) としての用法である。

参考文献

- Acanfora, Fr. (1976) : *Gramatica italiana per tutti*, Klett.
 Arnavielle, T. (1998) : *Le morphème -ant : unité et diversité*, Peeters.

- Arnavielle, T. (2003) : « Le participe, les formes en *-ant* : positions et propositions », *Langages*, 149, pp.37-54.
- Barceló G. J. et J. Bres (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Bonnard, H. (1987-1988) : *Grand Larousse de la Langue Française*, Larousse.
- Bonnard, H. (2001) : *Les trois logiques de la grammaire française*, Duculot.
- Cellard, J. (1996) : *Le subjonctif*, Duculot.
- Combettes, B. (2003) : « L'évolution de la forme *-ant*, aspects syntaxiques et textuels », *Langages*, 149, pp.6-24.
- Cosme, Chr. (2008) : « A corpus-based perspective on clause linking patterns in English, French and Dutch », C. Fabricius-Hansen et W. Ramm (éds.) : *'Subordination' versus 'coordination' in sentence and text*, John Benjamins, pp.89-114.
- De Carvalho, P. (2003) : « « Gérondif », « participe présent » et « adjectif déverbal » en *-ant* en morphosyntaxe comparative », *Langages*, 149, pp.100-126.
- Desclés, J.-P. (1995) : « Les référentiels temporels pour le temps linguistique », *Modèles linguistiques*, 32, pp.9-36.
- Fasciolo, M. (2007) : « Le gérondif simple in italien », *Cahiers Chronos*, 19, pp.127-144.
- Franckel, J.-J.(1989) : *Etude de quelques marqueurs aspectuel du français*, Droz.
- Franckel, J.-J.et D. Lebaud (1991) : « Diversité des valeurs et invariance du fonctionnement de *en* préposition et préverbe », *Langue française*, 91, pp.56-79.
- Gettrup, H. (1977) : « Le gérondif, le participe présent et la notion de repère temporel », *Revue romane*, 12, 2, pp.211-271.
- Gougenheim, G. (1950) : « Valeur fonctionnelle et valeur intrinsèque de la préposition *en* en français moderne », *Grammaire et psychologie, (Journal de psychologie, numéro spécial)*, pp.180-192.
- Grevisse, M. (1993, 13^{ème} éd.) : *Le bon usage*, Duculot.
- Guillaume, G. (1919, rééd. 1975) : *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Hachette.
- Guillaume, G. (1929, rééd. 1970) : *Temps et verbe*, Honoré Champion.
- Halmøy, J. O. (2003) : *Le gérondif en français*, Ophrys.
- Halmøy, J. O. (2006) : « Présence du participe dit « présent » dans la presse », G. Engwall (éd.) *Construction, acquisition et communication*, Université de Stockholm, pp.203-216.
- Halmøy, J. O. (2008) : « Les formes verbales en *-ant* et la prédication seconde », *Travaux de linguistique*, 57, pp.43-62.
- Haspelmath, M. et E. König (éds.) (1995) : *Converbs in cross-linguistic perspective*, Mouton de Gruyter.
- Henrichsen, A. J. (1967) : « Quelques remarques sur l'emploi des formes verbales en *-ant* en français moderne », *Revue romane*, 2, 2, pp.97-107.
- Herslund, M. (2000) : « Le participe présent comme co-verbe », *Langue française*,

- 127, pp.86-94.
- Herslund, M. (2006) : « Le gérondif — une anaphore verbale », M. Riegel et alii (éds), *Aux carrefours du sens*, Peeters, pp.379-390.
- Hayase, N. (1997) : « The role of figure, ground, and coercion in aspectual interpretation », Verspoor, M. et alii (éds.) : *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of the Meaning*, John Benjamins, pp.33-50.
- 早瀬尚子 (2002) : 『英語構文のカテゴリー形成—認知言語学の視点から』 勁草書房.
- 早瀬尚子 (2007) : 「英語懸垂分詞における「主観的」視点」川上誓作・谷口一美 (éds.) : 『ことばと視点』 英宝社, pp.77-90.
- 早瀬尚子 (2009) : 「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (éds.) : 『「内」と「外」の言語学』 開拓社, pp.55-97.
- 春木仁孝 (1991) : 「ジェロンディフー現在分詞との比較—」 *Gallia* (大阪大学), 31, pp.12-21.
- 春木仁孝 (2000) : 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo. 一半過去の属性付与機能について—」『フランス語フランス文学研究』 77, pp.84-96.
- Høyer, A.-G. (2003) : *L'emploi du participe présent en fonction d'attribut libre et la question de la concurrence avec le gérondif*, Mémoire de DEA, Université de Bergen.
- Imbs, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- 岩田早苗 (1997) : 「フランス語の“Quand + imparfait”について」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部) 3, pp.67-75.
- 川口順二 (2006) : 「モダリティ動詞 aller」『芸文研究』(慶應義塾大学) 91, 3, pp. 328-310.
- Killie, Kr. et T. Swan (2009) : « The grammaticalization and subjectification of adverbial *-ing* clauses (converb clauses) in English », *English Language and Linguistics* 13, 3, pp.337-363.
- Kindt, S. (1999) : « *En pleurs* vs. *en pleurant* : deux analyses irréconciliables? », *Travaux de linguistique*, 38, pp.109-118.
- Kindt, S. (2003) : « Le participe présent en emploi adnominal comme prétendu équivalent de la relative en *qui* », *Langages*, 149, pp.55-70.
- 木内良行 (2005) : 『フランス語の統語論研究』 勁草書房.
- Kleiber, G. (2007) : « En passant par le gérondif avec mes (gros) sabots », *Cahiers Chronos*, 19, pp.93-125.
- Kleiber, G. (2008) : « Le gérondif : de la phrase au texte », O. Bertrand et alii (éds) : *Discours, diachronie, stylistique du français. Etudes en hommage à Bernard Combettes*, Peter Lang, pp.107-123.
- Kleiber, G. (2009) : « Gérondif et relations de cohérence : le cas de la relation de Cause », *Recherches ACLIF : Actes du Séminaire de Didactique Universitaire*, 6, pp.9-24.
- Kleiber, G. et A. Theissen (2006) : « Le gérondif comme marqueur de cohésion et de cohérence », F. Calas (éd.) : *Cohérence et discours*, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, pp.173-184.

- Kortmann, B. (1991) : *Free adjuncts and absolutes in English*, Routledge.
- Larreya, P. (2005) : « Sur les emplois de la périphrase *aller + infinitif* », H. B.-Z. Shyldkrot & N. Le Querler (dir.) : *Les périphrases verbales*, John Benjamins, pp. 337-360.
- Le Bidois, G. et R. Le Bidois (1967) : *Syntaxe du français moderne*, 2 vols., Picard.
- Le Goffic, P. (1993) : *Grammaire de la phrase française*, Hachette.
- Le Goffic, P. (1995) : « La double incomplétude de l'imparfait », *Modèles linguistiques*, 31, pp.133-148.
- Lemaréchal, A. (1997) : « Séries verbales et prépositions : incorporation et déculmul des relations », *Faits de langue*, 9, pp.109-118.
- Lipsky, A. (2003) : « Pour une description sémantique et morpho-syntaxique du participe français et allemand », *Langages*, 149, pp.71-85.
- Mélis, L (1983) : *Les circonstants et la phrase*, Presses universitaires de Louvain.
- 西村牧夫 (1991) : 「線形性と連続／非・連続－現在分詞とジェロンディフの場合－」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』26, pp.105-176.
- Novakova, I. (2001) : *Sémantique du futur*, L'Harmattan.
- 大久保伸子 (2007) : 「Je t'attendais 型の半過去の表現特性と非自立性について」『フランス語学研究』41, pp.1-15.
- 大島義和 (2011) : 「類像性と等位接続構文の様態解釈－英・仏語の対照を通じて」『国際セミナー 日本語とフランス語：対照言語学的アプローチ』(2011年5月14～15日, 於名古屋大学) 発表ハンドアウト.
- Riegel, M. et alii (1994) : *Grammaire méthodique du français*, P.U.F.
- Rihs, A. (2009) : « Gérondif, participe présent et expression de la cause », *Nouveaux Cahiers de Linguistique Française*, 29, pp.197-214.
- Rihs, A. (2010) : « Gérondif et participe présent : la simultanéité comme critère discriminant », in C. Vet et alii (éds.) : *Interpréter les temps verbaux*, Peter Lang.
- クロード・ロベルジュほか (1983) : 『現代フランス語前置詞活用辞典』大修館書店.
- ノエル・ロドリゲス (2006) : 「フランス語のジェロンディフの機能と解釈について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』21, pp.101-127.
- ノエル・ロドリゲス (2007) : 「フランス語のジェロンディフについて－「ながら」節との比較考察－」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』16, pp.289-302.
- 佐藤房吉・大木健・佐藤正明 (1991) : 『詳解フランス文典』駿河台出版社.
- Schrott, A. (2001) : « Le futur périphrastique et l'allure extraordinaire », *Cahiers Chronos*, 8, pp. 159-170.
- Shapira, Ch. (2003) : « Préposition et conjonction ? : le cas de *avec* », *Travaux de linguistique*, 44, pp.89-100.
- Squartini, M. (1998) : *Verbal periphrases in Romance : aspect, actionality, and grammaticalization*, Mouton de Gruyter.
- Sten, H. (1952) : *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.

- 武本雅嗣 (2004) : 「ジェロンディフ構文の形式と意味」『仏語仏文学』(関西大学), 31, pp.125-143.
- 武本雅嗣 (2011) : 「英語の統合型現在分詞に対応するフランス語の非定型動詞について」『時制とその周辺領域の発展的研究』(科学研究費補助金 基盤研究 (C) 課題番号 20520441 研究成果報告書), pp.61-70.
- Talmy, L. (1978) : « Figure and Groud in Complex Sentences », J. H. Greenberg (éd.) : *Universals in Cognitive Linguistics*, Stanford University Press, vol.4, pp.627-649.
- 田中善英 (2006) : 『フランス語における複合時制の文法』早美出版社.
- 寺村秀夫 (1984) : 『日本語のシンタクスと意味』2, くろしお出版.
- Togby, K. (1982-1985) : *Grammaire française*, 5 vols, Akademisk Forlag.
- Tomlin, R. (1987) : *Coherence and Grounding in Discourse*, John Benjamins.
- Torres Cacoullos, R. (2000) : *Grammaticization, Synchronic Variation and Language Contact : A Study of Spanish Progressive -ndo Constructions*, John Benjamins.
- Uchida, M. (2002) : *Causal relations and clause linkage*, 大阪大学出版会 .
- Viney, P. et J. Dalbelnet (1977) : *Stylistique comparée du français et de l'anglais*, Didier.
- 和田尚明 (2007) : 「『内』の視点と時制現象:日英語対照研究」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 52, pp.93-149.
- 和田尚明 (2009) : 「『内』の視点・『外』の視点と時制現象 一日英語対照研究」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (éds.) : 「『内』と『外』の言語学」開拓社, pp.249-295.
- Wagner, R. L. et J. Pinchon (1962, 1991): *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette.
- 渡邊淳也 (2001 a) : 「連結辞 ainsi の機能について」『玉川大学文学部論叢』41, pp.161-184.
- Watanabe, J. (2001 b) : « Le conditionnel du « discours d'autrui » », *Etudes de langue et de littérature françaises*, 78, pp. 216-230.
- 渡邊淳也 (2002) 「Devoir の認識的用法と条件法」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』17, pp.189-219.
- 渡邊淳也 (2003) 「Devoir の機能について—認識的用法を中心に—」『玉川大学文学部論叢』43, pp.105-139.
- 渡邊淳也 (2004 a) 「動詞 sembler の機能について」『玉川大学文学部論叢』44, pp.93-112.
- 渡邊淳也 (2004 b) : 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社 .
- 渡邊淳也 (2005) 「Non seulement について」『玉川大学文学部論叢』45, pp.81-96.
- Watanabe, J. (2006 a) : « Addition quantitative, addition qualitative et la locution non seulement », J. Kawaguchi et alii (éds.) : *Cognition et émotion dans le langage*, 慶應義塾大学 (21世紀COE心の統合的研究センター), pp.191-205.
- 渡邊淳也 (2006 b) : 「フランス語の「丁寧の半過去 (imparfait de politesse)」と日

- 本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究』『文藝言語研究 言語篇』（筑波大学）50, pp.41-84.
- 渡邊淳也（2007 a）：「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法』『フランス語学研究』41, pp.54-59.
- 渡邊淳也（2007 b）：「間一髪半過去をめぐって』『文藝言語研究 言語篇』（筑波大学）52, pp.151-175.
- 渡邊淳也（2008）：「分岐的時間の表象をもちいた時制・モダリティの連関の説明の試み』『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）54, pp.15-44.
- 渡邊淳也（2009 a）：「時制とモダリティの連関への新たな接近法』『フランス語学研究』43, pp.77-83.
- 渡邊淳也（2009 b）：「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の綜合化・文法化について』『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）55, pp.123-144.
- 渡邊淳也（2010 a）：「拘束的用法の *devoir*, *falloir* の否定の多義性について』『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）57, pp.25-41.
- 渡邊淳也（2010 b）：「フランス語と日本語における留保マーカーについて』『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）58, pp.55-74.
- 渡邊淳也（2011）：「ステレオタイプ理論をめぐって』『フランス語学研究』41, pp.54-59.
- Wilmet, M. (1997) : *Grammaire critique du français*, Hachette.